
かみしゃまと、いっしょ。

ゼロキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かみしゃまと、いっしょ。

【Zコード】

Z5477P

【作者名】

ゼロキ

【あらすじ】

「普通？」の女子高生、吉中柊が気付くと、そこは間違えようもなく異世界だった。

普通はパンくる所も、なんとなく冷静になつてしまつ彼女の使命は

……

異世界を楽しむこと？

それも、神しゃまと一緒に。

異世界、はじめました。

気がつくと、異世界でした。

いや、頭がおかしくなったとかそういうことはなくて。

辺りは水晶の洞窟

一面地底湖？

現在私の座り込んでいる場所は、水中から生えてるような六角水晶群ではなく…台座のように平らな水晶である。

螢のような虫が、点滅しながら飛び交っていて…でも、螢よりも光量が大きくて明るい。

室内の間接照明の青いバージョン?くらい。

神秘的…すぎて、すぐさま理解した。

こんなところが、地球上存在してたら絶対有名観光地。ゆえに、ココは異世界である…と。

しかしこの場に座り込んでいる私以外の人人がいるならば、やはり聞くだろう。

「あの、ijiはど」ですか？」

目の前で少し楽しそうに自分を覗き込む外人の青年に、私は痛む頭を押さえながら聞いた。

「ん? 分かってるだろ? 異世界だつて」

「……」

はい。なんとなく返答予想出来てました。

何か雰囲気が…私が彼の立場だったら、そう答えるだろ? なあといふものだったのです。

「…言葉、通じるんですね…」

「ああ、神言語だからでしょ」

「しん……」

なぜかスムーズに脳内漢字変換された「しんげんじ」にて、意味は分かつたが、ちょっと分かりにくくなかった。

「あなた、神様ですか？」

なんというか、ありきたりなお約束？

でも私性格的に、心読まれようと超常現象起こされようと、あんまり信用置けないと思います。

人間的な意識のある神様……て、どうよ？

「あー……神様ってわけではないな、正確には」

青年の否定にちょっとほつとすると、

普通のシャツにジーンズの神様……外人さんですが、別に美形つてわけでもない……いや、不細工でもないけど、普通つてオーラが漂つてる神様……ないよね。

「まあ、自覚薄いけど、神様っていえば神様かも」

「へ？」

どうゆう意味が聞く前に、彼はしゃがみこんでいた姿勢から立ち上がりだした。

「俺の名前はアーサー、アメリカ人で少々日本龐鳳のゲームマニアだった」

お嬢さんの名前、聞いていい？と小首を傾げられ、私も名のった。

「私は吉中柊、日本人で女子高生」

そうして座り込んでいた姿勢から、彼のよう立上がる。腰が冷えたし。

うう、体がバキバキいう。運動不足かしら？

「よしなかひいらぎちゃんか、こちらではヒイラギ・ヨシナカか」
いい名前だねと一つ頷いて、彼……アーサーは言った。
「ヒイラギちゃん、君はこの世界の神しゃまに選ばれましたっ」

「…神、しゃま？」

私、物凄く胡散臭そうな表情を浮かべた自信があります。

説明、終わりました？

胡散臭そうな表情の私に、「アーサーさんは」「つーん…」と唸つた。
「神しゃまとしか言こよひがないんだなあ、神様つて感じじやない
らしいよ」

「ないらし…って、誰が言つたんですか？」

「アーサー」

自身を指さす青年に、思わずため息をつく。

「人事に聞こえましたが…」

「いや、俺のことだし…うーん、説明難しいな」

少し考えこんだアーサーさんは、何か思いついたかのように顔を上げた。

「よりしろつて、分かる？」

「イタコとかのですか？ 神を宿す？」

「そう、それ」

「…………嫌な予感がするんですが…」

「あー、ごめんね。もひ選ばれちやつてるし、宿つちやつてるから

「え」

アーサーはにこりと笑つた。

……イイ笑顔である。

「じゃなきや、君も神言語使えないから」

「…………使つてるんですか？ 私」

「日本語喋つてるんでしょ？ 意識的には。神言語使つてなかつたら、俺に英語で伝わらないから」

一応日本語、片言理解できるけどねと苦笑され、私は喉を押された。本当に何も、違和感ないのですが…

「まあ、この世界の神様だから、この世界の住人相手の言語は自動翻訳されるから。読み書きも『理解』出来るよ」

「…………あなたも、神を宿しているんですか？」

「いやいや

半信半疑で確認をとるけれど、あっさり否定されて私は首を傾げた。

「もう、よりしろ本人のアーサーは帰っちゃったから。俺は宿つて

た方」

すっと手を差し出される。

握手を求められるかのようだ。

たぶん意味があるのだろうと、私も手を差し出してみて……するつとすり抜けた手のひらに鳥肌を立てた。

何か……濃い濃密なモノをすり抜けた感じはあった。

固まりかけの寒天の中とか、稻田の泥水に手を突っ込んだような……

「……やどつてた、ほう?」

「そ、よりしろ本人が帰れるようになる頃、宿つてた方はその人の分身みたく人格を持つんだ」

「人格を持つ……と、いうことは」

「そう、君の中に宿つた神しゃまには人間の求めるような神様像はない。意識すれば分かると思うけど、自分の中にほわほわとしてあつたかくて、神様つていうより神しゃま?としか言じようのない力を」

実は自覚していた。

なんというか、小さな子犬とか子猫を腕に抱いている気分。

可愛くて可愛くて、ずっと抱いていたいような撫でていたいような気分が、気づいた時からあつた。

そして子犬、もしくは子猫側からも、嬉しい大好きーみたいな……懷いているような反応がある感覚。

なんというかソレらが、アーサーと名のる存在の言葉を受け入れているのだ。

これがなければ、私の反応はもっと冷淡だったろうし、家に帰せと訴えていただろう。

家に帰せと訴えないのは、私を私の家に帰せるのは私の中に宿つたモノだけだという感覚があるからである。

「…なぜ、私？よりしろはこの世界の人でもよくない？それから、私に宿つている神…うん、神しゃまね、確かにかみしゃまとしか言いようがないわ…と、あなたは別物みたいだけなぜ？」

「んーなぜヒイラギちゃんが選ばれたかつてのは、正直分からぬ。俺がアーサー選んだ時も今、ヒイラギちゃんが感じているような存在なんだぜ？たまたまこう宿りたくなつて、手を伸ばして連れてきちゃつたみたいな感覚じやないかな？たぶん」

首を傾げるアーサーさんに、感覚的な問題だと言われているようで納得した。

「あ、なぜこの世界の住人じゃダメなのかは、分かるぜ。俺の前の人とかその前の人とか世界とのしがらみが多くて、宿主」と壊れて世界も壊しかけたから」

アーサーさんは両手を広げた。

「この世界は壊れかけてたのを俺達で修復、創造したものなんだ。俺、じゃない、アーサーが俺の宿主になつたのはたまたま偶然だったけど、神しゃまにとつては宿り心地が良かつたんだよ。第三者の立ち位置に立てる存在つてのがね

で…と、言葉は続いた。

「俺で上手くいったから、また異世界に手を伸ばしたんだと思づ。あと、神つていっても唯一神じゃないから俺らは、神としか言いうのない力の固まりだけど…この世界つていうエネルギーでもあるんだ。俺は俺として宿つたアーサーの個性人格があるけど、普段は世界に溶け込んでる。君の中の神しゃまとは一緒にあつて別物だし

…」

私は片手を上げて、何とか説明しようと言葉を選んでいたアーサーさんを止めた。

なんとなく分かつたし、分からぬことも…何となく説明されてもされなくても、如何しようも無いことは分かつた。

今切実に知るべきことは一つだらう。

「私、いつ帰れるかしら？」

「そりゃ、神しゃまが満足するまで？俺はアーサーと相性良すぎて、千年ほど引き留めちゃつたけど……あ、ちゃんと浚つた時と場所に帰したから……たぶん、大丈夫だよ」

根拠のない保障にため息が零れたが、自分の中の神しゃまが自分がいるのは嫌？みたいに窺う気配が可愛くて……絆された。千年なんて先は考えられないけれど……とりあえず、嫌になるまでは付き合つてあげましょうと思つてしまつくりこには……宿つた神しゃまの氣配は可愛かつた。

旅人、はじめます…近くの村まで。

「それじゃあ次に、この世界のことを簡単に説明しようが」とりあえず状況を受け入れた私に、アーサーさんはこれまでまったく気にしていなかつたことを切り出した。

「この大陸の名前はアルカイダ、この星の中で大きな大陸はあと二つあるけど、そこには名前はついていない…未開の地。あとは少数民族がいたりいなかつたりする小さな島国も東にいくつか。ここは靈山で名前はない「人」の入れない土地。大抵、人の入れない土地は聖域だけど、ヒイラギちゃんは入れるから気をつけて」「何を気をつけると?」

「入れることを知られちゃうことを。生き神様扱い…されたい?」私は首を振る。

こんなことになつて、神しゃまとしか言ひよつのない存在を感じても、私は基本無神論者なのだ。

正月には神社にお参りにいつて、クリスマスにはケーキを食べ、星を見ては神話にもどづく星座を思い出し、死んだら近所の寺の墓へと入るだろう。

そうゆう日本人なのだ。

「ま、気をつけることはそれと、何でも思いのままになるつてことかな?」

「え」

「君に宿つているのは?」

「……神しゃま…」

「そ、望んで叶えられないことはほとんどないから。それこそ世界だつて滅ぼしかけるくらいのことは出来る。神しゃま宿したよりしろが、この世界で一番強い存在だから…ヒイラギちゃんがこの世界を壊そうとしたら止められないし…でもそうしたら高確率で自分自身を壊すようなものだから、気をつけてね」

「……うわー……」

「で、この世界ですが、簡単に言うとオンラインゲームの世界です」物凄く楽しそうなアーサーの表情に、私は何となく疲れを感じため息をついた。

うん。まあ、それだけで何となく通じちゃうから便利よね。

「RPGな世界なわけね？」

「そう、剣と魔法、モンスターの世界。典型的な

アーサーさんは本当に楽しそうに、笑った。

「ヒイラギちゃんも気に入ってくれると嬉しい。アーサーと俺で作った世界を。君が世界を好きになってくれればくれるだけ、世界は癒え成長するから

そして神しやまも成長しますと、凄く優しい声で言った彼は、何となく確かに神様っぽかった。

「他に何か聞きたい」と、ある？

「いえ、知りたい」とにきりはないけど、そういうのは実際世界を見て体験して知るわ。ところどころの出口はどうち？」

アーサーさんの指す方角を見、水の流れでゆく先なのだなと思つたぶんこれは川に通じていて、川を辿れば村とかがあるんだりつ。私はその場で軽くジャンプしてみる。

何でも思い通りになると言われた通り、私は……大きく……洞窟の天井近くまで飛び上がって、ふんわりゅつくりと降りた。確かめてから、もう一度ジャンプする。

今度は、アーサーさんの指し示した出口の方へ。

水から生えている水晶柱の尖った先端に、ふんわり降りて、つま先立ちする。

「それじゃあ、さよなら」

「いや、ヒイラギちゃん、そこは『またね』にしようよ。」

呼べば俺は応える設定になつてゐるから」「

ひらひらと手を振られ、私も振り返す。

そうゆう風に設定したアーサーさんは、感謝する。前例でも今の私と同じ人がいるって、心強い。

「そうね、じゃあ…」

ココが家つてわけじゃないけど。

「こつてきます」

私の言葉にアーサーさんは目を丸くして…あははっと声を上げて笑つて言った。

「こつてらつしゃい」

……じ。

こつして私は『たぶん召喚の間』から、旅立つたのだ。

旅人、続いてます。

さて、洞窟を抜けるとそこは山の中だった。

地底湖のような場所だったそこは、山の内部でも頂上付近だったようだ。

空は青く、木漏れ日溢れる木々と… 洞窟内ほど大きい物はないが、至る所から生えている水晶…

森には道らしき道がないので、川の上を歩く。

…うん。普通（？）に、沈まずに水の上に立てた。

漫画とか小説なんかに見る、超常現象的なことは一通り出来そうである。

しかし近場の村に向かうのは良いとして、今の私の格好は旅人向きてはいけない。

セーラー服に学校指定の鞄。

実はずっと手に持っていた。

だって、ココで気づく前までは下校途中だったんだもの。

洞窟内は寒かつたから、コート着用でもよかつたけど外はちょっと温かくて、下山したらもつと温かいだろう。

春っぽい空氣だ。

向うは冬、二学期後半だったのだが…

とりあえずマフラーを外して、鞄の中に突っ込む。

薄手の鞄はそれだけでいっぱい。不格好に膨れた。

中には携帯と財布、空になつたお弁当箱くらいしかはいつてないのに。

リュック、欲しいな…

自分の私物である黒いリュックを思い出す。旅行用でそれなりに大きい。

すると、目の前で『力』が発生した。

力としか言いようがない。

空気の密度が変わったような… 神しゃまの力なんだろうことは分かった。

そして、田の前に… 私が欲しいと望んだリュックと似た物が現れた。私のリュックではない。何せ「デザイン的に」ここはこうだったらしいなあ… でも無いからこれでいいやと買った私物ではなく、私の欲しかった理想通りの「デザイン」の物だったから。

物質創造力？

「うわー…」

少し川がカーブしていて河原があつたので、リュックを持っていつたんそこへ足を下した。

色々準備するのに、水の上は心情的にちょっと落ち着かなかつたので、丁度いいといえば丁度よかつた。

鞄と出現したリュックを置き、コートを脱ぐ。

私の使える力は神しやまの力。

なんでもありな力。

それに基本RPGな世界なら、たぶん存在するだろつ。

四次元ポケット的な魔法道具が。

私はリュックを覗いた。

……まつくらいで、底が見えなかつた。

うん、出来あがる時に考えついちゃつたからだらう。

本当、何でもありだ。

石を放り込んで、ちょっと怖かつたけど「石」と思ひながら手を突つ込めば、掴み取り出せた。

鞄を突つ込み、とりあえず「」で装備を整えることにする。

剣と魔法の世界にふさわしく。

神しやまの力で作り出したのは、リュック、シャツ、ジーンズ、そしてブーツ……うん、ごめん欲しかつたけど買えなかつた趣味に走りました。

あまり、剣と魔法の世界にふさわしくない。現代的な物中心が、真っ先に作り出された。

まあ、少数民族の住む島国出身者と偽る予定なので、あまり気にしないでおく。

それらを身につけ、制服一式はリュックに仕舞つた。
ポケットの沢山ついたベストも作り出し、そこへどんな衝撃を受けても割れることのない試験管を、何本が差し込む。コルク栓をしてある物の中身のいくつかは、なんちゃつてポーションである。
…あと紅茶（笑）だって、紅茶のギフトとかである物を基本に想像しちゃつたんだもの。

薬入れのベストを着込むと、私の胸はつるぺたなので、これだけで一見細身な少年のような体格になる。

髪はそれなりに長いが、肩甲骨を隠すくらい。

さらさらの癖のないストレートは、自慢の持ち物であるが…それはあまり女性を感じさせるものではないらしい。
友人が言つには美少年剣士……目つきが少々キツイせいか、あまり女性らしい甘さを感じさせない顔立ちのせいもあるのだが。
まあ、『美』少年は友人の欲目だろう。

私の容姿はごく普通のレベルだ。

夏に一度暑くて、ポニー テールにしたら「つんでれっぽいこと言つてつ」と頼まれた揚句に押し倒され、貞操が危うかつた一件を思い出してしまい目元を押された。

あれは友人が可笑しいせいだ。

…ぶつ飛んだ友人を思い出したせいもあり、装備品は刀とする。

でも素人が扱えるわけがないので、刀には敵対相手への達人的技量（任意で峰打ちあり）効果を付属しておいた。
腰にベルトをつけ、刀を下げ……旅人っぽいフードつきのコートを

作り出し羽織った。

リュックを持つて、自身の格好を見て…とりあえず納得する。

うん、ギリギリコスプレっぽくない。

第一異世界人発見、初戦闘しました。

さて、改めて川の上を進むこと数十分。

何となく空気の濃度が、変わったように感じた。

気づけば水晶柱も、辺りには見当たらなくなっている。

「聖域を出たのかな…」

しばらくすると上流では滅多に無かつた河原が点在するようになり、そしてその一つに道らしきものとつながっていることに気付いて、川の上から降りた。

道は大人二人分くらいの幅で、踏み固められた跡があつた。

とりあえず水筒を一つ作り出して、川の水を汲む。

生水だけど聖域から流れているのだから、たぶん大丈夫だろう。なんでもありな力はあるけど、乱用はなるべくしないようにしようと思う。

…うん、この装備とか色々、もう十分乱用しているみたいだけど。

「…これからこれから」

ケーリバイキングに行つてから帰つてくる途中の、友人のダイエット宣言のような口癖を口にしつつ、水筒をリュックに仕舞い道へと向かった。

森の中は綺麗だった。ハイキングに来ているみたいだなと思う。木の種類は見たことないものばかりだけど、ちょっと楓っぽい。

異世界じゃなく、異国を旅行しているみたいだ…そんな考えはすぐにかき消えた。

私は走り出していた。

人の怒鳴る声、争う気配。

何だか嫌な感じのする方へ。

だつて、子供の声がした。

争いあつてるのが大人同士だったら、私は気にしなかつただろう…

でも、こんな森の中で、子供と言い争っている大人なんてろくなもんじやない。

そして私は見た。

子供…と、いうか少年を押さえつけている大人達を。具体的に言つと、少年の服は破かれ…大人達のうち一人は自分のズボンから性器を露出させようとしている最中で、少年は押さえついている大人とは別の大人に口を手で塞がれ涙目で唸つっていた。

初戦闘に躊躇いは無かつた。

刀を握つたとたん、体が刀に付属させた効果で自然に動く。あつという間に大人三人を切り捨てた…いや、峰打ちだけど私に向つて声を上げせる暇は、与えなかつた。

変質者や強姦魔に情けは無用。

ドウツと倒れた三人に、襲われていた少年は目を丸くする。打たれたのか頬が赤く腫れているが、美少年であつた。

黒髪に青い目、肌色は褐色。

女の子っぽい雰囲気はないけど女顔で、大きくなつたら色氣のあるエキゾチックな美形になりそうである。

…確かにホモの口リコンに狙われそうな…と、悪いけれど納得してしまう。

それほど幼くはなさそうだが…十一・二だらうか。

「もう大丈夫だよ」

そう言つて微笑むと、少年の表情はくしゃと歪んで私に抱きつき、大きな声を上げて泣き出した。

うん、友人が見たら羨ましがるであろう状況だな…と、思いつつ少年の背を撫でた。

少しして、泣きやんだ少年は、恥ずかしそうに私から身を放した。助かってほつとして…泣いてしまったことが、恥ずかしいのだろう。

「怪我は？」

「だ、大丈夫です。何もされてませんつ」

「…………うん、殴られた？」

後は押し倒され、押さえつけられた傷が見える。

何もされてません発言はスルーしておく。あいつら、慣らしもせず
に突つ込むつもりだったのか…とか、考えてしまつたけど黙つてお
く。

シャツは破かれ、ズボンはナイフを入れられたのか切られ、大事な
所等丸見えであつた。

リュックの中から仕舞つていた方のコートを取り出して、着せる。
うん少年、私のことを男性だと思つていいね？

でも男に襲われたばっかりなんだから、相手が男でも警戒した方が
いいよ？

試験管を一本取り出し、コルク栓を抜く。

「ポーションって知つてる？」

「え、そんな高価なものいただけませんつ、擦り傷だし、頬も頭も
平氣です」

「ん？頭？」

すつと後頭部に手を回せば、ぬるりとした感触がした。

「いたつ」

手には血がついていた。

「飲みなさい」

背後から鈍器で殴られたのだろう怪我に、私の声は固く命令形となり
少年は私の手についた血を見て、結構自分が酷い怪我をしている自
覚をしたのか、頷いて試験管の中身を飲みほした。

怪我は私の想像通り、淡く光る光りの粒が生まれ跡かたもなく消え
た。

少年はその効果に目を丸くする。

「RPGなら、似たようなのがつても可笑しくないと思つたんだけ
ど…」

と、反応を待つ。

「これ、マジックポーションじゃないじゃないですか……」

「普通のポーションとは違う?」

「普通のポーションはこんな、あつとゆづ間に癒えたりしませんし、値段だつて桁が違いますつ」

少々顔色を悪くして、そんなお金僕持つてませんと訴える少年に苦笑した。

「弁償しろなんて言わないから、安心して。私が飲めと命じたんだから、気にしなくていい」

頭を撫でて…怪我は治つても残つっていた血と汚れに立ち上がる。

「向うに川があつた。そこで汚れを落とそう」

「あ、はい」

何となくぼーとした少年の様子に首を傾げ、一応手を繋ぐ。

…まあ、大泣きしたし疲れたんだらう。

「…と」

行きかけて足を止める。峰打ちして倒した大人達が呻き声を上げたので、その存在を思いだしたのだ。

放置?しておけるわけがない。

私は、近くに生えていた木に巻きついた蔓に触れた。

「つるのむち」

うん、だつて汚いモノを露出させた大人を縛りあげるの、面倒だし：ポケモン技が私の民族の魔法技術つてことで。

ファンタジーっぽい魔法呪文を唱えるのは恥ずかしいけど、「火のこ」とか「水でっぽう」ならそんなでもないし。

なんでもありな力の制限にも、丁度いいだらうし。

…ゲームやつてたわけじゃないから、そんなに詳しくないけどね。

蔓が生き物のように伸びて、大人達をくるくるの芋虫状態にしたのを見て、少年はやっぱり目を丸くしたけれど私の手から逃げようとはしなかつたので、ちょっと安心して川へと引き返す道へと向かった。

少年、リージと私

川で汚れを落とさせ、リュックの中に手を突っ込んで作り出したタオルとシャツ、ズボンを取り出す。

私のサイズだけど、まだ小さい少年なら着れるだろ？

「うん、目の前で全裸になられてもね、今更騒げないし…いいけどね。」

「あの、洗つてきました」

「うん、はいタオル」

「あ、ありがとうござります」

「着替えも私のだけだ、使つて。下着は流石に貸せないけど自分着替え設定だと、男性用下着なんてあるわけないしね。」「いえ、そんな、十分です。ありがとうございます、本当に」「ん」

頷いて、微笑む。

すると少年は耳まで赤くなつて、慌てて服を着出した。

お礼を言つのが、恥ずかしい年頃なのかしら？

「あの、僕の名前はリージです。あなたのお名前を聞いてもいいですか？」

「うん、私の名前は、ヒイラギ」

「ヒイラギ様は」

「いや、様付けはいらないよ？」

なんで様付け？と首を傾げつつ、断りを入れる。

「え、でも…えつとヒイラギ、さんは貴族の方ではないんですか？」

「なんで？」

「マジックポーションなんて凄いものを、僕なんかにポンとくれるし…身につけている物も高そうだし、タオルとかふわふわだし」

「うん、私の故郷では一般的な物だから、気にしないで」

「どちらからいらしたんですか？」

私は山の方を指さす。

「あっち、の方向から来たんだ。元は小さな島国出身でね、大陸に来たのは初めてだから、貴族ど「こうか」のお金だつて持つてない一文無しだよ?」

「聖域つて入れませんよね」

「うん、だから迂回してね、村とか探してたんだ」

「なら僕、案内出来ますつ」

「よろしく頼める?」

「はい?」

「はい」

少年と手を繋ぎ、道を進む。

「この先に僕らの村、シントレーべがあります。聖域の麓の村なので、それなりに栄えてます。周辺に強い魔物が出現しないこともあります、初心者な冒険者には丁度いい土地で知られています」

「ふーん、ギルドはある?」

「はい、勿論。小さいんですけどね」

「私でも登録できるかな?大陸出身じゃないけど」

「出来ますよ、文字が読み書き出来て犯罪者として手配されなければ、誰でも登録は可能です。僕も一応ギルドの冒険者なんですよ」と、少年の手が離れた。

「あ、ちょっと待つって下さい」

「ん?」

「いえ、さっきの奴らに最初に襲われたのがこの辺りで、装備品とか採取した物とか落として…と、ありました」

ナイフとベルト、革袋を拾つて少年は掲げ見せてくれた。

「そういえば、さっきの奴らとは知り合いで?どうゆう状況で襲われたの?」

少年…いや、リージの表情は私の言葉に強張った。

「知り合いではないんですけど、ギルドで見た覚えはあるので冒険者

だと思います。僕は採取の依頼を受けて、今日はこの森にやつきました…そこをいきなり背後から、殴られて…最初は採取物の横取り目的かと思つたなんですが……」

「ああ、うん、ごめん。もういいから震えるリージを抱きしめて頭を撫でる。

「ごめんね」

そう囁くと、リージの震えは止まった。

その代わり、また耳まで真っ赤になつていた。

「あ、あの、もう大丈夫です」

恥ずかしがつてゐるリージは可愛かつたが、私は友人ほど意地悪な性格ではないので、からかうことなく解放してあげた。

再び手を繋ぎ、村へと向かう。

一・一度、兔に角が生えたような生き物を見かけたが、襲いかかつてくるような物はいなかつた。

結構な距離を歩いたが、私に疲労は欠片もなかつた。

神しやま効果かもしれない。

リージも慣れているようだつたが、襲われたり大泣きしたせいもあつて少し疲労が見えた。

「村まであと、どれくらいかな?」

「二十分くらいです」

「んー、それくらいなら村まで頑張つて歩いて、休んだ方がいいかな?頑張れる?」

「え、あ、はいっ、僕なら平氣ですっ」

「子供つて、こんな可愛い生き物だつたつけ?」

友人の弟なんて、挨拶もろくにしない生き物で、すぐに私から逃げ出すし、友人によく遊ばれて癪癩を起している子供っぽい姿しか浮かばない。

うん、比べようもないか…あの友人の弟なんだし、その友人の私も警戒されているんだろう。……強く生きろよとしか言えない。

「リージは冒険者だつけ」

「はい。ランクはCです」

「ランク？」

「A、B、C、D、Fランクがありまして、Fの方がなり立てです」

「へえ、Cランクなんだ？」

「はい、なり立てですけど」

少し嬉しそうに言つ姿を見て、なるほどなあと思つ。ちゃんと子供らしいけど、長い間働いているせいでもあるだらつ、どこかしつかりとした芯があるのでリージは。

「リージみたいな小さい子が冒険者になるって、大陸では普通なのかな？」

「あの…僕一応十四なんですけど」

「ん？うん、でも声変りもしてないでしょ？」

私のアルト声よりも、女の子っぽい声だものね。

「…別に珍しいって」とはないです。村の中での依頼なら、子供のおじぎかい稼ぎ程度の物もありますし。孤児院から出たばかりの十四・五の男の子なら、結構冒険者になる子が多いです」

「うん、でもリージの年でそのランクなのは、珍しいんじゃない？」

「僕は三年前に両親を亡くして、あの村出身だし、両親の残してくれた財産もあつたので、孤児院には入らずに独り立ちしたんですね」

「…………なるほど」

謝る必要はないだろうと判断して、代わりに頑張ったねと微笑んで見た。

リージはやつぱり恥ずかしくなったのか、また耳まで真っ赤になつた。

村、到着しました。

村は長閑な田舎という雰囲気だった。

小さな石垣で囲まれた土地には、世界法則が働いている気配を感じた。

うん、お約束の力と呼ばづ。

『街中に魔物は入ってきません』ってやつだ。この石垣が大きく崩れたりしたら、解けてしまいそうな代物だが。村の入り口から、まっすぐ行くと大きな建物が一つだけ頭を出していた。

「あれは？」

「教会です、聖域の近くなので、立派な建物なんです。神父さんは管理が大変そうですが、貴重な時を知らせる魔法具があって、日のあるうちには一時間ごとに鐘がなつてカラクリ人形が踊るので、この村唯一の観光建造物です」

「ああ……」

うん、大手百貨店みたいななんて言つても通じないだろうけど、時間の概念は共通のようだ。

まあ、アーサーさんの創造した世界だし、共通点は普通に多々あるだろう。

現在は一時十八分くらい…

「あっちの建物がギルドです」

手を引かれ、教会周辺の建物群の一つへと向かう。

微妙な時間帯のせいか、あんまり村人を見かけなかつたが、ギルドの建物内は小さな居酒屋も兼用しているみたいで、いくつかのテーブルがありその二つには人が座つていた。

四人のグループと、パイプ煙草をふかしている老人一人。

飲食とはカウンターが違うのだろう、出入り口近くの方にあるカウンターでは眼鏡をかけた緑色の髪をしたお姉さんが、こつくりこつ

くつと居眠りをしていた。

奥のカウンターの中は調理場のように見え、動いている人影も一つ見えた。

「ミアリスさん…」

少々呆れたようなリージの表情に、これはいつものことなのだろうなというのが雰囲気で分かった。

「おーい、ミリアスちゃんつ、リージが帰ってきたぞつ、お客様さんつれてつ」

テーブルの一つを塞いでいた四人のうち、リーダーっぽい青年が声を上げて…ミアリスと呼ばれたお姉さんはビクッと震えあがって、顔を上げた。

「いらっしゃいませつ、本田はゞ依頼ですか？クエストですか？」
うん、残念な美女だ。

スタイルよく顔立ちだつて美人なのに、色氣ゼロな天然系。彼女の目も髪と同じ縁だった。

「ミアリスさん……」

「あれ、リージくん、今日は帰つてくるの早かつたわね。採取は上手くいった？あれ？何だか行く前と服装が変わっちゃつてるけど？」
リージの表情が強張る。

これは、私が言つた方がいいだろうか？

「実はその、襲われて」

「えつ、襲われつて、盗賊でも出たの？この辺の魔物相手なら、リージくんは問題なく対処出来るレベルだしつ、怪我、怪我はつ？」
私が口を出す前に、リージは青ざめながらも説明を始めた。

ぎゅうつと握つていた手に力が入る。

そして受付の女性は、軽く混乱してしまつ。少し落ち着け。

「いえ、彼の話では冒険者らしいですよ、背後から殴りかかられたそうです」

「え、あれ？あなたは？」

「うん、天然さん。ずっとリージの隣に立つていたのに、今やつと

気づくつて……

「私の名前はヒイラギ、彼が襲われていた所を助けた者です」

「ありがとうございます、ヒイラギさんつ、リージくんを助けてくれてつ」

身を乗り出してお礼を言つ彼女に、ちょっと引く。

「あつ、私の名前はミアリスです。よろしくお願ひしますね」

「…はあ、はい」

「それでは。いらっしゃいませ、本田はー依頼ですか？クエストですか？」

にこいつと再びなセリフを口にした彼女に、少し頭痛を感じた。

「…森の中に彼を襲つた冒険者達を、縛りあげて転がしてきたんですが、放置したままでもいいですか？」

「え？」

「私は島出身で、大陸は初めてなので一般的な大陸の常識を知りません。今回伸した相手達がギルドの冒険者らしいので、聞きたんでした。責任問題とか発生しませんか？」

「え、えーと？」

「ミアリスちゃん、私が警備兵呼んできてあげる。リージくんに危害を与えるなんて、いい度胸してるじゃない」

さつき声をかけてきた男性のいるテーブルから、今度は赤毛にネコ耳の女性が拳を手のひらにスパーーン、スパーーンと叩きつけながら立ち上がった。

うん。受付のお姉さんの反応からいつても予想していた。

実はリージ、このギルドのアイドルだね？

リージはきょとんとしていて、私の手を引いた。

「あの、ギルドの登録をするんじや…」

「うん、それは後でも出来るからね。別にあいつら放置しといて、魔物の餌にするなら、それはそれでいいかもしないけど」

「いっ、いえ、そんなわけにはつ」

「あ、ねえ、そこあんた、縛り上げた奴らのどこまで道案内して

よ

ネ「耳女性が戻ってきた時に、私は「あ、はい」と返した…が。
「いえ、僕が行きます」
と、リージが手を上げた。

「リージ」

私は思わず、咎めるように彼の名を呼んだ。

「だって僕のことでの、これ以上ヒイラギさんの手を煩わせるわけには…」

私はリージの頭を撫で、身をかがめて彼の顔を覗き込んだ。

「リージ、君はポーションで治したといつても、酷い怪我をしていた。それに疲れているだろう。無理をしちゃダメだ。私の言っていることが分かるね？」

目を合わせて、真剣な表情で言つ。

リージは分かつてくれたようでも…でも心苦しいのか、ギクシャクと頷いた。

ん?

なんですか、こっちを見て赤くなってるんだろうか？

私と、異世界一日目終了。

「あ、ここから最近、他所から流れてきた冒険者だわ」

「耳の女性、レリーフさんが転がしておいた奴らを見て言った。
「しかし、こんなにぐるぐる巻きにするの、面倒じゃなかつた？」

「いえ」

私は木に繋がつていて、手を置き、技名を唱えた。

「つるのむち」

鳶は思い通りに動いて、芋虫状態から起き上がり歩けるくらいの拘束へと変え、プチリと鳶を切らせた。

「あんた、精霊術師っ？」

「いえ、私の島に伝わる魔法です」

「ちょつときょつとした様子だつた兵士さん達一人も、私が何でもないこのように言ひつと、やることを思い出したのか男達に手をかけた。

「おー、立て」

意識は取り戻していた男達は、身動きして唸る。

「そのガキに襲われたせいでの、動けねえんだよ」

「被害者は俺達だつ」

うん…しらばつくれるつもりなんだ?

私は冷笑を浮かべていたし、隣ではレリーフさんの髪がボワリと膨らみ広がった。

「…じゃあ、なんで、あんた下半身露出をせているの?」

酷く甘つたるく、けれど恐ろしい響きを伴つてレリーフさんの声が響いた。

私もリージも『襲われた』としか言わなかつたけれど、芋虫状態から脱した後の、男の格好に予想がついたのだろう。

確認するかのように視線を送られたので、一つ頷くことで肯定する。私達の様子に危険を感じたのか…兵士達一人が、すさつと男達の側

から離れた。

「そうか、動けないなら仕方ないよね
チャキリッ」と、刀を抜き…

レリーフさんは腰につけていたグローブを、手にはめた。

「いらないモノ、切り落とせば軽くなつて動けるようになるかな?」

「あら、あたしが全身マッサージ、してあげてもイイワよ?」

ふとレリーフさんと目が合い、微笑みあう。

それから數十分、醜い悲鳴と命乞いが、心地よく森の中に響いた。

再び村に戻る頃には、日が落ちかけていた。村の入り口に近づくと
小さな人影が待っていた。

「ヒイラギさんっ

「リージ?」

満面の笑みで駆け寄ってきたリージは、兵士に引つ立てられた囚人の影にびっくりとして足を止めた。

しかし、悲鳴を上げたのは三人の男達の方だった。

「ひいっ、ごめんなさいごめんなさいっ

「許してっ、許して下さいっ」

「た、助けてっ、助けて…っ」

…頭が可笑しなったかのように同じ言葉を繰り返す姿が、ちょっと氣味悪かったのか…大きく避けるようにして私の脇へと並び、手を握った。

兵士さん達も少し疲れた表情で「ではここで、ご協力感謝します」

「ほら、いくぞ」と、詰め所へと彼らを誘導しつつ去つて行つた。

「リージ、休んでなさいと言つたのに」

「いえ、その…何だか、ヒイラギさんがいないと落ち着かなくて…真つ赤になつて、恥ずかしそうに言つりージに、レリーフさんが「くはっ」と何らかのダメージを受けていた。

友人を思い出すな…その反応。

まあ、ともかく

「仕方ないな。…とりあえず、まずは換金できる所…か。いい加減お腹すいた…」

それに眠い。こちらに来たのは下校途中だつたし、とつぐに夕飯食べて寝て、朝食食べて学校行つて…な、はずだ。

「あつ、あのつ、『飯なら僕が奢りますつ！宿だつて僕の家に泊つて下さいつ」

「え、でも、年下の子にたかるのは…」

ぽんと肩に手を置かれる。振り向けばレリーフさんが笑つていた。

「いいじゃない、奢られてあげなさいよ」

「レリーフさん」

「レリーフでいいわよ、あんた気に入つたし。あたしもヒイラギつて呼ばせて貰うわ」

そう言つと、一人して引っ張られギルドへと戻ることとなつた。

ギルドは込む時間なのか、席は満席だったが、昼間のレリーフのつれだつた三人が手を振り、そのテーブルに混ぜてもらうことができた。

リージの奢ってくれたパンとスープは、凄く美味しかつたし。レリーフが仲間達の注文したお酒のつまみや肉料理を、私とリージに取り分けてくれたりもして…お腹はいっぱいになつた。お酒を飲まされそうになつたけど、民族上の掟でと断つておいた。

うん、未成年うんぬんの問題ではなく…友人に一度悪戯で飲まされたことはあるけど、記憶がなくなつたからだ。それだけならともかく、翌朝の友人が恍惚としていて、女同士も有りかも…と、呴いて

いたのがちょっと怖かつたのだ。

考えたくないけど、ショタコンっぽかつた友人が、バイになつた原因

因：酔つた私なのかもしれない……本当に私、何をした？

ちなみに『私』の衣服に乱れはなかつた。友人は半裸だつたが。

：一生、思い出さなくていいことなんだろう。

換金所、にて。

目を覚ますと、木目の壁が見えた。

「…朝、か」

うん、今更夢落ちとかも期待しません。

私の中で、神じゃまがはしゃいでいるのが分かるし。更に私の腕の中には、リージがいるし。

……うん。リージの家で、今は亡き両親のベッドは存在するものの、使い物になる布団はリージのベッドの物だけだったから。並んで寝ていたけど、狭いのと夜はちょっと冷えたので、湯たんぽがわりに抱き込んだらしい。

まあ、リージも私の胸にしがみ付いてるけど。

顔を埋めるほど膨らみも谷間もないけど、一応柔らかみはあるから気持ちいいんだろうね…手のひらがしっかりと…

私はそおっとリージの手を胸から外して、抱きしめていた腕を解き、身を起こした。

女として反応が間違つていようとも、襲われたばかりで怖がってる子供を突き放せるわけがないから、気にしない。

服を着替え、装備を確認する。

ゆるく三つ編みにしていた髪を解き、櫛をいれているとリージがもぞもぞと身動きをして身を起こした。

「…あ、ヒイラギさん」

「おはよう、リージ」

「おはよハジマサム」

リーン、ゴーンツと鐘がなつて、教会が時を知らせた。

9時だ。

ちょっと時間がかかつてしまつたのは、手元にあるビーズ作品のせいである。

うん、よく考えたら換金するような物、持つてなかつたんだよね。鞄の中に入れっぱなしだつた友人への誕生日プレゼント製作用の、ビーズ装飾道具一式で簡単に指輪をいくつかとネックレスをいくつ作り上げました。趣味なので…と、いうか初めて作った時から誕生日プレゼントにねだられる。友人の手持ちのアクセサリーは、ほとんど私の作品だつたりする。

いつかは調金も始めたいのだが、予算が…「うん。ともかくリージにも売れると保障してもらつたので、売りに行きます。

換金所はギルドの隣の家でした。

「すげえな、あんた細工師か？」

背の小さい、赤毛にネコ耳の ottさん が感嘆の声を上げた。
… 体系はドワーフっぽいのにネコ耳、で、ある。

奇妙に似合つていて、ごつい ottさんが妙に可愛い。

「いえ、細工師というわけではありません」

リージに私が作つたと聞いたからだろう、 ottさんのセリフに首を振つた。

「しかし、始めて見るな、こんな小さな石をより合わせて作つたアクセサリーは」

「そうですか？」

「ああ、大きさをそろえるのは勿論、穴を開けようとしたら碎いちまうぞ、この大きさじゃあ」

宝石は大きい方が価値があるんだが、細工師の技術の価値がこれにはあるな…なんて呟かれ、沈黙する。

うん、ビーズです。天然石も混ぜてるけど、数百円で買えます。評価されるのはそこか…と、少しがつかりしていると、 ottさんは更に口を開いた。

「なんといっても綺麗だ。こりや貴族や王族にだつて売れるぞ?」

んな所だと、金貨二十枚で精一杯になつちまうし、正直今家が出せる全資金になつちまつて、買いたれねえんだが……」

綺麗と言つてもうれて、気分は良くなつた。

「あ、じゅあ一個で

とりあえず一番小さな指輪を指さしてみる。

「うん、金貨一枚で家族四人が、一年樂に暮らせるんだよね？ 昨日酒場で聞いたお金の価値を、思い出して苦笑する。二十枚なんて貰つても困る。

「いや……一個で金貨二十枚なんだが」

「…………」

私は目元を揉んだ。

リージの顔色も、少し悪い。うん、こんな値段付けられるとビヒるよね？

私が朝、起きてから……無造作に作り上げてたの、見てたものね。ネックレスを三個、指輪は十二個作った。

総額、考えたくない。

「……私の故郷では、この石も細工もそつ珍しくはないので、もつと安く買い取つてもらいませんか？」

「いや、できねえ、こんな凄い物を安く流通させられねえ。あんたの故郷では珍しくなくても、俺が初めて見るアクセサリーだ、故郷は大陸とまったく取引をしない島なんだろう？ そうゆうとこ特有の技術は基本、何でも高価になつちまうんだ」

「……私から安く買い取つて高く売るつてわけには……」

「ばーろー、いくわけないだろうがつ、鑑定士のスキルを失うわつあ、もしかして換金所を経営するには、詐欺が出来ないようなスキルが必要なんだ？と、納得する。

「うん。スキル……存在するんだ……本当、ゲームだね。

「そのスキルで金貨二十枚、ですか」

「ああ、俺が生きてる間、これ以上は現れないって分かるレア・アクセサリーだ」

レア……まあ、異世界の物だものね。私が道具を創造しないかぎり、現れるわけがないか。

「あ、じゃあ、こっちの石だけってのなら売れますか？」

余っていた残りの石と、ビーズを取り出す。

「そうだな、これなら金貨五枚で買い取ろう」

うん、指輪を作るにしても必要数に足らない数だつたけど……この世界の装飾物に混ぜてなら、使い所はあるだろつ。買い取る場合は、金貨七枚になるらしい。

金貨を五枚貰い…

そのうちの一枚を、銀貨八枚と銅貨二十枚にしてもらつた。

現在の所持金、金貨四枚・銀貨八枚・銅貨二十枚、硬貨は零である。

ちなみに換金所のおっさんは、レリーフの親父さんだとリージに聞いた。

ああ、そういうば同じ赤毛にネコ耳……奥さん、背の高い人なんだううな……と、思った。

……なんか働かなくても、当分食べていけるお金が入ってしまったけど……とりあえずギルドに向った。

先に、ちょっと遅い朝食を取るけれど。

豆のスープとパンを食べながら、冒険者を観察する。どうもこの時間帯は、比較的若い人が多いみたいだ。

換金所から少しおぼんやりしていったリージに、食べるよう促すと、リ

ージは少し不安そうな表情で私を見た。

「やつぱりヒイラギさんは、凄い人なんですね」

「私がつて言つより、故郷の技術だらつけどね」「でも凄いですっ」

そう言つて項垂れる。

「リージ？」

「ヒイラギさんは、これからどうするんですか？」「ん？」

「ヒイラギさん強いし、技術もあるし……すぐ『初心者の村』には用がなくなるんだろうなあとつて……」

「うん、実際ほとんど神ishまの力です。」

初めて刀を達人なみに振り回して……そうゆう筋肉とか鍛えてないから、刀を放して急激に疲れても、あつという間に回復する……それにただの回復じゃないみたいなんだよね……なんか、明らかに筋肉が……ついてきてるんだよね……

まあ、いつか神ishまの後援が無くとも、平気になるくらい鍛えられたら……ちょっと楽しいかもしねない。

「しばらくはこの村にいる予定だけ?」「本当ですか?？」

リージは顔を上げて笑顔になつた。

「うん、大陸の常識に疎いしね。リージがよかつたら、しばらく私

に色々教えて欲しいな

「も、勿論ですっ、あ、あの、よかつたらその間、僕とパーティを組んでもらえませんか?」

「パーティ?」

「えつと、冒険者同士の仲間というか、グループみたいなもので」

「ああ、なるほど。うん、よろしく」

握手をして、交渉成立。

私とリージは、朝食の残りに取りかかった。

さて、食事を終え、やつとギルドの窓口に向ひ。

ミアリスさんが、にこっと微笑んだ。

「いらっしゃいませ、本日はご依頼ですか? クエストですか?」

… その挨拶はお約束なんですか?

「冒険者登録をしたいんですが」

「はい」

カウンターの中から、『ごそ』ごそと道具を取り出し並べられる。

「島人さんなんですね? 文字は書けますか?」

「ええ」

用紙と羽ペンを渡され、受け取る。

名前に年齢

主用武器

獲得スキル

と、書く欄があつた。

「あ、スキルはこちらの水晶球に手を触れて、頭に浮かんだ物を書き出してくださいね。会得していない物を書いても登録はされませんので、正直にどうぞ」

ふーん…と、ちょっと濁った緑色の水晶に触れてみる。

これらも魔法具なんだろう。

獲得スキル

- 『神しゃま』『世界創造』『神言語』『空中浮遊』『水上歩行』『サムライ進化SSS』『剣技・刀B』
- 『ポケモン魔法』『細工師AA』『魔道具創造』『家事全般C』

ぱつと浮かんだのがこれで、おいおいと内心で突っ込む。

『神しゃま』スキルに入れとくなよ…と。

勿論アーサーさんに対してだ。

あと、サムライ進化つてなんだと突っ込みたい。と、考えたとたん、頭の中に浮かんだ。

『サムライ進化』（名刀と呼ばれる特殊な剣に選ばれ主となつた者だけが、まれに得られる特殊スキル。その刀を振るに相応しい技量と力を、急速に身につけることが出来る。）

うーわー…説明機能つきですか…

AAとかBつてのは何かな？

『スキルレベル』

- D・初心者。まったく知らない人よりはマシ
- C・趣味のレベル。一流とは言えないけれどそれなり。

B・一流

A・超一流

AA・他の評価系スキル持ちに認められると、まれに得られるレベル

S・伝説

SS・人神の祝福持ち

?

SSS・神しゃま効果

「……」

えっと……サムライ進化は元々あつたスキルで、神じやまのよりしろの肉体だけに発現するレベルってことか……と、いうかよりしろだけが持てるレベルかよつ

『固有スキル』

個人の持ち物で、レベルの値がないもの。

うん、やばかつた……アルファベットのついてないのは、私のオリジナリになるのか……神言語はよりしろのみのスキルだからかな？……これつて書かなければバレないかな？

習得スキル

『スキル偽造』

「……」

『スキル偽造』（習得スキルを偽ることが出来る。『世界創造』スキルの持ち主だけが得られる）

「……」

「あの、ヒイラギさん？どうしました？」

結構長い間固まっていた私に、ミアリスさんは首を傾げた。

「何か問題でもありました？」

「いえ……」

『サムライ進化A』『剣技・刀B』

『一族魔法SS』『細工師AA』『家事全般C』

とだけ書いておいた。

只今、
転職中。

私の書いたスキルに、ニアリスさんは目と口を大きく見開いた。

そして予想通り叫ぶ

一人神の祝福持ちなんて、初めて見ましたっ！」

「島の私の一族しか使えなし魔法なので、そもそも祝福を得ていないと、島の出入り出来ませんから」

騒がれるのに冥想の上であります。

友人や友人の弟、知り合い達の顔を、ぱつと思い浮かべながら言つた。

たた単に偏るよりも説得力が増すたゞ

人神でいふのは、神じやまと遙て人の信仰が作り出した神で
いし。それなら島特有の神で、一族の守り神的なものの祝福なら、
有りではないかと思う。

「この村のギルドでは初なんですよ」

「ああ、アーティスの魔晄は、スバルでおく

魔法刀だし……だからとりあえずAにしておいた。

剣技・刀Bは、魔法刀効果とサムライ進化効果での引き上げが入っているだろう。

このまま刀を振るうのに体が、サムライ進化で対応していけばSレ

だつて、私作つたこの刀、一応銘は平仮名だけど『ざんてつけん』

だもの。

それにふさわしくあるなら、伝説級にはなりたい。

「さて、書けましたけど」

まだ何か言いたそうだったミアリスさんだが、ともかく用紙を受け取つて石板の上にのせた。

石板が淡く発光して、用紙の…記入した部分が消えた。

用紙を除けると、石板の方に文字が淡く発光して移つっていた。

「カード発行」

ミアリスさんがそう宣言すると、石板の上で光りが集まつて手のひらサイズの石板と同じ色のカードとなつた。

「こちらかお客様のカードとなります。カードと水晶に触れて下さい」

スキル確認をした水晶球に再び触れ、カードを触るとカードにはFという字が刻まれた。

これは冒険者レベルなんだろう。

「スキル確認・カード更新には次回から銅貨一枚かかりますけど、新たにスキルを得ると受け付けられるクエスト数が増えますので、スキルを得た・スキルのレベルが上がつたと思つたら、確認と更新は投資として下さいね」

なるほど…と、頷いておく。

「誰かと組む時や依頼人へのレベル・会得スキル確認証明の場合は

『履歴表示』で示されますから」

「履歴表示?」

確認したいなと思って呟くと、カードは再び淡く光つて…石板サイズに広がつた。…光りの文字だけが。

ヒイラギ

年齢 16

主用武器 刀

会得スキル

『サムライ進化A』 『剣技・刀B』

『一族魔法SS』 『細工師AA』 『家事全般C』

冒険者レベルF（初心者）

依頼数 0

クエスト数 0

達成件数 0

失敗件数 0

「なるほど」

「ヒイラギさん、僕の履歴も見せますね」

少し緊張したような表情でリージが言って、「ギルドカード」と呟く…うん、ちょっと驚いた。

手元が光ってカードがどこからともなく、出現…したんだもの。もしかして必要ない時は消えるのか？凄いな、なくす心配がない。

「履歴表示」

リージ

年齢 14

主用武器 ナイフ

会得スキル

『薬草知識C』 『剣技・ナイフC』

『聖石採取C』 『家事全般D』

冒険者レベルC（村の冒険者）

依頼数 2

クエスト数 89

達成件数 80

失敗件数 9

「あの、こんなスキルしかないんですけど…いいですか？」

「勿論」

にこつと笑いかけ…

「で、パーティ契約はどうすれば結べるかな？」

首を傾げて聞いてみたら、なぜかミアリスさんが絶叫した。

転職、完了。

「なに? ミアリスさん…」

絶叫したミアリスさんに、リージが顔を顰めて言った。
うん。初めて見る表情に、口調だ。

そこはかとなく冷たい響きの声と、冷たい眼差し。

リージのオリエンタルな美貌を引き立てて、いつもより大人っぽく見える。

心臓には優しくないが。

うん、ちょっと迫力あるわ…馴れ馴れしさを拒絶する雰囲気だ。

そんなリージを気にした様子もなく、ミアリスさんは大きな身振り手振りをつけて、カウンターから身を乗り出して言った。

「だって、リージくんっ！これまでアイリーフちゃんにいくら誘われても、ずーとソロだったのに…」

「それが何？」

リージの眉間に皺が寄つて、ますます不機嫌そうになる。

「僕は冒険者^{こうじや}っこがしたくて冒険者になつたんじゃない。生活のために冒険者になつたんだ。半分遊びのグループに関わつてなんていられないよ」

「でも、アイリーフちゃんはっ」

「それに、あんなのが勧誘とは僕は認めないね」

「うぐっ」

きつい眼差しと声に、ミアリスさんは声を詰まらせる。

なんか知らない名前も出てきたし、リージの知らない表情にも驚いて、話に入れなかつたけど…

うん、気にかかることが一つ。

「『めんリージ、私も生活のためつて言つよつ半分観光目的…』

「いえっ、ヒイラギさんには助けてもらつたし、だからってわけじゃないけど少しでも助けになれば」

私の言葉にリージは即座に首を振つて、声色も表情も柔らかいものに戻して言った。

「その…ヒイラギさんは凄いスキルの持ち主だし、すぐに僕の助けなんて必要なくなると思うけど…」

「そんなことない。助かるよ?」

「じゃあ、パーティ組んでもらえますか?」

「うん。じちらじや、よろしくね」

そう返すと、履歴表示をしていた光りが一瞬強く輝き…一番下に文字が増えていた。

パーティ 契約

相手 リージ

パーティ名・無名

リージの方にも…私の名前が契約者として刻まれていた。

「パーティ名?」

「通り名とかです。名のつて、世間に定着すると登録されるから」

「あ、その場合もこちらで銅貨一枚で確認、登録となります」

少し複雑そうな表情で、でも姿勢を正してミアリスさんは言った。

「カードは必要とする時以外は消えます。カードが必要な時は「ギルドカード」と呼びかければ現れますから。必要としない時に言葉を口にしても、現れることはありませんから」

さつそく依頼の紙が貼られたボードの前で、色々見学してみる。

「この村ではそれほど危険なクエストは無いので、採取系とお使い系がほとんどです」

「うん。あ、聖石 百グラム・銀貨?」

一枚だけ桁の違う依頼料の紙に目を止める。

「そう言えばリージのスキルの中に、聖石採取つてあつたね」

「ええ、聖域近くの土地でまれに見つかる石で、教会関係の聖具を作つたり魔法使いや聖騎士の武器や防具作成に必要らしいです。僕はスキル登録できるくらい見つけるので」

リージは袋の中から石を取りだした。

聖域でいたる所に生えていた水晶柱だった。

大きさは桁違いに小さいが。

小指：くらいの大きさだ。

「これで十グラムくらいですね…あの依頼は聖域近くの土地に、常時貼りだされますよ」

「へえ」

「基本クエスト受け付けは自己責任で、この依頼書の下に書かれているBつていうのがこの村では一番危険なクエストです。大抵の依頼はDレベルですね、何も書かれていらないのはFレベルで、村の中でのお手伝い関係になります」

「ふーん、冒険者のレベルがFでも、出来るならBとかも受け付けられるつてこと?」

「ええ…それが保障出来るスキルなんかを持つていれば…つてことで、ヒイラギさんなら大丈夫ですよ」

「うん。でもしばらくはリージに色々教わりたいな、薬草知識、とか?」

「はいっ、勿論」

はにかむような笑顔を浮かべたリージに、ほのぼのとした気分を味わう。

うーん…ニアリスさん、リージに嫌われてるのかしら?

最初寝てたのを咎めるように呼びかけた時は、呆れた感じで…そう冷たい感じはなかつたけど…

そんなことを考えていると、リージの表情が固く強張った。
視線は…私の後ろ?

と、振り返ると…少年少女、三人が険しい表情で立っていた。

リージと、幼馴染。

赤毛にネコ耳の…幼女?が。腕を組んで睨んでいる…「うん、背が凄く小さい。リージよりも頭一つ分くらい小さい。背中に魔法使いの杖っぽいものを背負つていて、なぜかゴスロリ系の服装だ。赤毛にネコ耳…何となく予想がついた。

「アイリーフ…」

リーズの表情から、柔らかさがじそつと消えた。

「久しぶりね、リージ。聞いたわよ、冒険者に襲われたそうじゃない

「…なに?」

リージの冷たい反応に、ネコ耳幼女の表情は益々きつくなつた。

「なに?じゃないわよつ、だから言つたでしょ、ソロは危険だつて!リージはまだ子供なんだから、私達のパーティに入りなさいって!」

「……子供つて、一歳しか違わないだろ。アイリーフの方がどう見ても年下だし」

「な、なによつ、私だつて年頃になれば、レリーフお姉ちゃんみたいに大きくなるもんつ!」

ぶわっと赤毛が膨らむ。

…やつぱりレリーフの妹か…背丈は父親に似てしまつたのだろう。リージより年上とは思わなかつた。

ネコ耳幼女の背後にはリージより少し体格のよい少年一人が、これも険しい顔でリージを睨みつけていた。

「ともかく今度こそ、私達のパーティに入りなさいつ!」「いやだね」

リージは即答して私の手を取つた。

「いきましょう、ヒイラギさん」

にこつと微笑みを向けられて、促され私は苦笑しつつ、それに従つ

た。

ギルドから出た所で背後から、大きな金切声が響いた。

「なつ、なつ、なによつ、なんのよつ、その男はああああつ！
！」

うん。ちょっと面倒臭そうな子だなあ……

「すいません、ヒイラギさん…依頼書、見てる途中だったのに…」
しゅんとした様子のリーシの頭を撫でる。

「大丈夫。さつきの子は？」

「アイリーフといつて、僕の一つ上で十五の…今の村人では唯一の
火の魔法使いです」

「へえ、大陸の魔法使いか」

「僕の母が魔法使いで、アイリーフに同じ火の適正があつたので教
えていたんです」

「もしかして、幼馴染？」

「はい…父さんと母さんが死ぬ前までは、それほど仲は悪くなかったんですけど…いつの間にかあんな感じになつて」

「あれは、友人の言葉で言うならシンデレ属性持ちなのではないか
しら…うん、さつきの発言の本質はあなた一人は心配なのつ、私
の力を必要としてつ！というものだろうか？」

「彼の二人は心からリージを忌々しく思つていそうだつたけど、彼
らがアイリーフに惚れてるなら有りえそうだ。」

「僕がよく聖石を見つけてくるんで、よく取れる場所を独り占めし
ているんだろうと思われてますし」

「そうなの？」

「いえ、薬草採取が僕の受けるクエストの中心なので、それで他の
人より見つけやすいんだと思います」

「なるほど、よく地面を見てるからね」

その後は村の中を案内してもらつた。

…人種的には色々だらうか？村の大きさは…宿屋や道具屋武器屋など、それぞれ一件ずつあればことたりてしまつくらい。

飲食店はギルドと宿屋、真昼亭（軽食店？）があつた。

建物として一番大きいのは教会だが、一番目に大きいのは宿屋だった。

半分はだいたい冒険者が住んでいて、半分は定期的にくる商連隊が泊るらしい。

私は村にいる間は、リージの家に泊ることを約束させられた。

そういうえばポーションは確かにそれなりの値段がした。

銅貨五枚である。

マジックポーションは銀貨五枚はするらしい。

勿論、品質によってピンからキリまであるようだが…

ちなみにポーションよりも安く、持ち運びのできる丸薬が、冒険者の持ち歩く薬で…ポーションの入った容器は三角フラスコに似たピコンで確かに、持ち歩くには不自由しそうな形と大きさだった。

私の試験管入りのポーションの量で効き目があるのも、凄いみたいだ…

うん、スキルに魔道具創造あつたじゃない？

なんか…この試験管に水を入れると、その水マジックポーションになるらしい。

…試験管から他の、コップとかに移すとただの水に戻るけど。

この試験管、魔道具でした。中身より容器のほうが凄かつた…

…神しやま…うん、装備整える時にあんまり神しやまの力を多用したくないと思つたせいも、あるかもだけ…高性能すぎるよ神しやま。

でもありがと。

リージに使わせた試験管を濯いでいて、気づいたことで、とうえずリージにも気づかれてはいない。

水入れたとたん、数秒発光して驚いた…私自身は割れない効果しか考えてなかつたし。

丸薬はマズイ上に、効き目もいまいちで無いよりはまし…くらいうい。

色々見て回つての感想は、うん確かにゲームの世界、だつた。

リアルRPG

『たぶん始まりの村』

一通り回つて、夕飯の食材を買いこんで、リージの家に帰ると…家の前では、ネコ耳シンデレラ幼女が待ち構えていた。

うん。本当に面倒臭そうな子だなあ…

火の魔法使いと、リージと私。

「何か、用？」

冷血モードに入ったリージに、私は苦笑した。

アイリーフはたぶんリージのことが心配なんだろうとは予想出来るが、私は基本ツンデレという人種を理解出来ない人間なのだ。友人のおかげ（？）で、どうゆうものがツンデレかは分かるのだが。好意を持つ相手に、キツイ言葉を投げつけるのはどうなのか…友人はそこがイイと言ひ張るが…

だからリージにも、わざわざ説明などはしない。

面倒だし。

冷たいリージの視線に怯むことなく、彼女…アイリーフは吠えた。
「リージに用があるわけではないわ、私が用があるのはそいつよっ！」

びしつと指をさされて、…うん、やつぱり面倒臭いと思う私。

そんな私の前に、リージは立った。

「ヒイラギさんに何の用？」

「リージには関係ないでしょっ！」

「ヒイラギさんは僕の恩人で、パートナーだ」

淡々とした口調だが、どこか響きの強い声でリージは言つ。

おお、これはもしや、庇われてる？

小さいけどやつぱり男の子、かつこいいなあ～と呑気に感心してい
たが、アイリーフは怒りで真っ赤になつて髪を膨らませた。

「何よつーすつとソロだつたくせにつ、私の誘いを断つてそんなひ
弱そうな男と組むなんてつ！許さないんだからつ！」

「別にアイリーフに許してもらつ必要性を感じない。それにヒイラ

ギさんを侮辱するなら、それこそ僕が許さない

うん、女なんだけどつて口を挟む間も無い。

それに今更性別言つても、かえつて火に油だよね…きっと。しかし言わなくともリージの私を庇う態度に、アイリーフが切れるのは早かった。

「なによ、なによ、なによっ！そんな男っ！」

アイリーフは背中の杖を抜いた。

「アイリーフ！？」

リージの咎める声にも構わず、彼女は詠唱した。

「火よ、火の精靈よ、この名アイリーフが呼びかける、アイリーフの名のもと、集い寄りて力を揮えつ！」

ファイヤーバードっ！」

リージが少し躊躇つてからナイフを抜き、アイリーフに飛びかかるとしたが、少し躊躇つた分発動の方が早かった。

出現し、形を持つた火の鳥に、リージはとっさにナイフを捨て、私の方へ反転して…私を庇おうしてくれた。

そんなりージを私は抱きしめ、片手を火の鳥の方へと差し出した。

「ひかりのかべ」

私達の前面で空気が煌めき、光が一枚の板のように形成された。もちろん、火の鳥はそれにぶつかって霧散した。

「え、」

私に体当たりして、軌道からずらそうとしたけれど、体格差から抱きつくで終わってしまったリージは、けれど私の言葉に振り向いて、それを見た。

「…………すごい」

「な、なによ、それっ」

目を丸くして硬直していたアイリーフは、無事な私達…の、抱き合つての格好を見て、再びその顔を怒りに染めた。杖を構え直す。

「火よ、火の精靈よ、この名アイリーフが」

今度はリージの方が早かった。

私から離れ、一気に走り寄り、アイリーフの前に立つ。

田の前に立たれて、アイリーフの詠唱は止まつた。

「どいてっ、どいてよリージっ！」

激情した声が響く…が、次に響いたリージの声の方が、ずっと怖かつた。

「つるさい、黙れ」

冷たいを通り越して、氷点下な声だつた。

バシッと音がして、アイリーフの小さな体が地面に転がつた。

リージの手元に杖だけが残る。

アイリーフは頬に手を当てて、身を起しす。両田からはポロポロと涙が零れていた。

「ひどいっ、何するのリージっー？」

そんな彼女を気にする事なく、リージは片膝を立て…その上に杖を叩きつけた。

止める暇もなかつた。

鈍いバキッという音が響いて、杖が中心から圧し折られていた。

リージの行動に、アイリーフは田を見開き…驚きでか、涙も引っ込んだ。

「…わ、たしの杖、リーシャさんの、お師匠様の形見の」

「今のお前に母さんの弟子を名のる資格なんて無い、一度と母さんの名を口にするな」

リージの放り捨てた杖をアイリーフは拾い上げて、止まっていた涙を再びボロボロと落とした。

「ばかっ、リージのばかあつ！もう知らないっ！」

泣きながら、でもすれ違はずまに私を睨んで…彼女は去つていた。

うん。最後まで口を挟むことも出来なかつたわ……まあ、これが私なんだが。

やういえば、一回終へ。

「『めんなさい…何か変なことに巻き込んでしまって…』
しゅんとした様子のリージの頭を私は撫でた。

「辛かつた、ね」

リージは決して、アイリーフを心から嫌っているわけでは無かったんだろう。

「お母さんの形見、折らしちゃったね」

そう、本当に嫌っているなら、これまでそんな杖を使わせているはずがない。

「…かあさんが、力を揮う者は感情だけで力を揮つてはいけないって、力を揮う責任を持たなくてはいけないって、一番大切なことだつて……言つてたのに」

悔しそうに涙を滲ませるリージに、その言葉に、胸が震えた。

「私も氣をつける」

「え？」

「凄く、素敵な人だつたんだね。リージのお母さん」

私の中の神しやまの力

なんでも有りな力だけれど、力に溺れないように。

「リージのお母さんの言葉、胸に刻んだ」

そつと胸元に手を置いて、微笑んだ。

神しやまを利用するだけの存在には、なりたくないしね。

リージはしばらく、ボーと私を見上げていて、それから心底嬉しそうに涙ぐみながら

「ありがとう」

と、笑顔になつた。

ささやかながら、夕飯は私が作った。

リージは野菜の皮を剥いたり切つたりは、それなりに出来るのだが、味付けが出来ないらしい。

両親が死んで、しばらくしてから自炊も頑張ろうとしたのだが、「シチューを煮込んでたら、なんだか変な色になつて…溢れ出てきて、鍋が…溶けました」

漫画かと突つ込みたいが、なにせアーサーさんの創つた世界である…

「…………うん、了解」

それから台所ではお茶を入れるくらいにしか、使用していなかつたそうだ。

塩以外の調味料は軒並み死滅していたので、野菜炒めと塩味の鳥肉スープである。

そしてパン屋さんで買つてきたパン。

うん、私も料理は簡単なものしか作れない。

しかもこの台所の火つて、かまどだし……都會では、コンロのよくな魔道具もあるらしいが。

だから『火の』で炎操つて何とかできただけど、普通の火だつたら火加減調節出来ずに焦がしてていた自信がある。

裁縫系の方が得意。

けど、リージは「美味しいです」と喜んで食べてくれた。

「うん、ちょっとキューンときた。なんだか、アイリーフとのこざこざ後から、リージの表情が更に柔らかくなつたといつか…大したものではないのに、そう喜ばれると私も嬉しくなつてしまつ。うん。リージみたいな美少年に、懐かれて、「美味しい」なんていつてもらえると、次はもっと頑張るつとも思つてしまつよ。

「今日はお風呂用意しますね」

「え」

思わず声が弾んだ。

この世界に来て、初めてのお風呂である。正直嬉しい。

「まず薪割りしないとなんですか？」

「あ、私がやるよ

「いえ、でも」

「修行にもなるから、やらせて?」

裏庭に案内され、積み上がった薪の一つを手にする。
うん、せつかくスキルにサムライ進化があるので。

鍛えないわけにはいかない。

薪を空中に放りあげて、素早く腰の刀に触れる。

最初の一、二度は刀に触れるより、薪が地面に落ちる方が早かつた
が何とか調節してみた。

一つ切りが四つ切になり、六つ切りまでは出来るようになつた。
目指すはハツ切りだが、気づいたらほとんどの薪を切り捨て終えて
た。

「…ヒイラギさん、凄すぎです」

「あはは、『ごめん…』

ちょっと楽しかったので、珍しく夢中になつてました。

その後は一人で井戸から水を運んで、リージは家庭菜園の中から数
束草を刈つて、それを煮詰めた。

「それ、何?」

「あ、初めて見ますか?体や髪を洗う薬湯です。口にすると不味い
んですけど、髪とか体に塗つて擦ると綺麗になりますよ」

「へえ、石鹼みたいなものかな?」

「ええ、でもかあさんは、これの方が髪がごわごわにならなくていい
って言ってたし……その、ヒイラギさんも僕と髪質似てそุดから、丁度いいかなと思って」

確かに黒髪ストレートはお揃いである。

一人ずつ火の番をして、お風呂をいただいた。
薬湯、泡立ちといい、香りといい最高でした。

トラブルの、行方。

朝である。

胸元にはリージ……うん、胸触られてるね。

二晩一緒だつたけど、やっぱリージは私が女とは気づいていないようだ。

ベスト脱いでも元々つるぺたなせいだろう。

とりあえず昨日のように、リージを起こさないよう起き…着替えて、裏庭で刀を振るつた。

サムライ進化のスキルは凄まじい。

体が温まる程度に、刀を振り回し…台所に顔を出すと、起きだしていたリージがお茶を沸かしていた。

「おはよう、リージ」

「ヒイラギさん、おはようございます」

差し出された…コーヒーに似た風味のお茶を受け取る。

「ありがと」

朝食は、昨日のパンの残り…うん、かさかさになつていたので、卵と牛乳と砂糖を混ぜた物にスライスして浸して、バターで焼きました。

後は野菜とベーコンの塩スープ

そのうちお米が恋しくなりそうだが、今の所はそれほどでもない。一人して朝食を終え…うん、リージはフレンチトースト？を気に入ってくれたようで、尊敬の眼差しで見られました。

適當な割合だつたんだけど、上手くいってよかつたですよ。

…朝食を終えてから身支度を整え、ギルドへと足を向けた。

下手したらまた、アイリーフが待ち構えているかと思つたが、そんなことはなく…薬草採取の依頼を数件受けて、森へと向かうこととなつた。

森は初日、リージの襲われた辺りに向った。

薬草の一つはこの辺りに群生しているらしい。

リージの様子が変わることもなく、少し安心した。…「うん、だつてあれはトラウマものだし……

今になつて思えば、私もよく平氣だつたなと思つ。

普通の女の子なら悲鳴を上げてただろう。

私のように、サーチ＆テストローライとはいかなかつたはずだ。いや、友人なら…私と同じかそれ以上の行動をしそうではあるが。

…観察には走らないよな？人として、助けるよね？

…少し、自信がない。…友人、だし。

ひとまず友人への疑惑は置いておき、薬草採取を手伝う。

薬草の効能や姿形、どちらに生えるものかということを教わりながら…依頼以外の薬草も見かけるたびに教えてもらつた。

「薬草つて、意外といつぱい生える物なんだね」

「いえ、ここが聖域近くの森といつことを差し引いても、何だか今日は…凄いですよ」

確かに初めて訪れた一昨日より、森は何だかわつさりしていた。

「あ

私は道端に生えてる水晶を見つけて、足を止めた。

「…

「…一昨日には無かつたよね？」

「ええ、というか道端に生える聖石を見たのは、初めてです」

とりあえずそれを採取して、ポケットに入れた。リージに渡そうとしたけど、見つけたのは私だからと遠慮されてしまったのだ。

そんなわけで、比較的簡単に依頼の物は揃つてしまい…お昼にとギルドで買ったお弁当を広げるまでもなかつた。

けれどせっかくなので、私の上陸した河原まで出て、お昼にすることになった。

うん… 河原は更に凄かつた。

聖石が… 人の腕ほどの大きさの物が流れついていて、周囲に小さな
聖石がゴロゴロ生えてました。

あーー… これ、私が装備整えるために川から降りた時、躊躇して川に
落とした奴だ… と、気づく。いや、河原に降りる途中に川から生え
てたんで、ちょっと蹴っちゃつたら意外と簡単に折れちゃつたとい
うか…

「ヒイラギさん… こんな、大きな聖石… 初めてです」

「… うん、もしかして薬草とか聖石が生えてたのって、これのせ
いかな?」
「だと思います」

原因、私があ… と、内心で呟いておいた。

見事な、スルースキル（笑）

森の豊かさのために置いていても、どうせ他の冒険者が取るだけだからと、私は聖石をリュックに詰めた。

「もうこれの報酬は山分けってことで、いい？」

聞いてはいるが決定事項である。

そんな私の様子が分かつたのだろう、リージも抵抗なく頷いてくれた。

「ラッキーだつたねえ」

「本当に」

お弁当のサンddieichを食べて、少しのんびりしてから村へ帰る。

「そういえば、ここに来てからまだ魔物と戦つてないなあ……」

「元々あまりいませんしね」

「角のある兔は魔物だよね？」

遠くに見える姿を指さして聞く。

「ええ、島では見ませんでしたか？この辺の一角兔は、あまり凶暴じゃないんですよね。物凄く近くで遭遇しなければ、襲つてはきませんね」

「なるほど」

「この辺で見かける魔物はスライムと一角兔、魔犬ですね。注意が必要なのは魔犬くらいです」

「スライム……やっぱいるんだ……」

私の視線の先には、ぐによぐによとした半透明の濁つたヘドロのような固まりがあつた。

うん。これが噂をすれば影つてやつだね？
リージはナイフを構え、私も刀に手を添えた。

「スライム？」

「はい」

目も口もない。クラゲのようなものだったが、それは細かく振動す

るかのように震え、飛び跳ねた。

空中で、薪割りの要領で切つた……

はずだつた。

「つおつ」

慌てて飛びかかつてきた、それを避ける。

「ヒイラギさんつ」

地面に落ちたソレにリーグがナイフを突き立てる。それはジュウツと音を立てて溶け消えた。

「大丈夫ですか？」

「うん、ありがとう」

刀を一振りして鞘に戻し、苦笑を落とす。

「ごめん、うつかりしてた」

「何があつたんですか？」

心配そうなリーグに、スライムを切れなかつた訳を話そうとして嘲笑に遮られた。

声の方を見れば、木の影から三人の男女が出てきた。うん。アイリーフと愛の下僕達である。

アイリーフの杖は短い物になつていたが、ひらひら『スロリ服も健在である。

……もしかして、ずっと隠れて待ち伏せしていたのだろうか？

「暇なの？」

私の心を読んだかのようなリーグの咳きは、笑うのに忙しい三人には届かなかつた。

「スライムも倒せない冒険者なんて、初めて見たわっ」

「あはははは、あんなに力ッコつけて、情けない」

「弱い者同士で傷の舐め合いか、リーグ」

ああ、喧嘩を売りにきたのかと、とても分かりやすい挑発だつた。

「さて、帰るうかリージ」

「はい、ヒイラギさん」

にこつと笑い合い、さくさくと帰り道を進む私達に、三人は慌てた様子で追いかけてくる。

ぎやーぎやー言つているが、華麗にスルーする私達に、その早歩きのスピードにも追いつけない三人。

少しムツとしていたリージも、三人を引き離して村の入り口が見える頃になると、少し息を切らしながらも楽しそうだった。

うん、私もちよつと楽しかったですよ。

私の楽しい気分につられたのか、神しゃまもきや らきや らはしゃいでいる感じがしたのだった。

クエスト達成、と？

村に帰つた私達は、さっそくギルドを訪ねた。まるで初日の時のような、微妙な時間帯のためか建物内には人の姿は少なかつた。

しかしカウンターには先客がいて、今日ニアリスさんは居眠りしていなかつた。

「あ、レリーフさん」

リージの表情が強張る。

振り向いたレリーフも、表情を強張らせた。

たぶんパーティメンバーに断り、私達の方へ歩み寄る。

ああ、昨日のアイリーフとの件かと気づく。

そう言えれば姉妹だったっけと思い出した。

「リージくん」

「レリーフさん…アイリーフの杖のことですか？」

リージは声を固くして、彼女を見上げた。

「三年前とは違います、彼女も冒険者です。謝りませんよ」

「リージくん、違う、」

「違いません、次僕らに杖を向けるなら、今度こそ僕は彼女にナイフを向けることを躊躇いません」

「リージ」

ぽんと頭に手を置いてみる。

「ヒイラギさん？」

「レリーフはリージを責めにきたわけじゃ、ないと想つよ」

レリーフの表情は一見怒りのようにも見える…が、目が…泣きそつな色をしていた。

「落ち着いて」

「ヒイラギさん…」

「ありがと、ヒイラギ。リージくん、『めんね

レリーフは深く頭を下げた。

「あの子が、ごめんなさい。三年前のこと…」

泣きだしそうになつたリージの表情は、更に固さを増したようだつた。

「レリーフさんに謝られても……」

小さく咳いて、腕を引かる。

「もう、いいです」

それは許しの言葉ではなく、拒絶の言葉だつた。

本当に泣き出しそうな表情になつたレリーフを、心配そうなパーティのメンバーが促し…レリーフ達は去つていつた。

気まずそうなミアリスさんのいるカウンターへと、一人で立つ。聞きたいことはあるけれど、一先ずは依頼達成報告である。

採取してきた薬草と量を確認して、ミアリスさんも氣を取り直したようで笑顔になつた。

「はい、依頼達成確認しました。ギルドカードをどうぞ」

カードを出し、二人で一緒に水晶へと触れさせた。

一瞬淡く輝く。

カードの履歴を確認すれば、依頼達成数が3になつていた。うん、地味に嬉しい。

薬草のことを色々知れたのも嬉しかつたし。面白かつた。

「あ、あと聖石を量つてもらえますか」

「え、リージくんまた聖石量れるくらい見つけたのっ？」

スゴイと田をキラキラさせたミアリスさんに、二人して顔を見合わせた。

……うん、リアクションが怖いよね。

「でも丁度人、いないしね」

「そうですね」

私はリュックの中から、聖石を取り出した。

小さな生えたての物をザラリと…それだけでもミアリスさんはスゴ

イスゴイと騒いだが、何というかだんだん声が途切れ…最後にあの聖域から流れてきたらしい大きさを取り出すと、涙目になつた。

「…………どうしたの？」

「河原に流れ着いていて、聖石が生えました」

「か、河原つてまさか…」

「ミアリスさん？」

「神聖石つ」

ミアリスさんはそう呟くと、真っ青になつた。
そして慌てて私に返してくれる。

「仕舞つてつ、すぐにつ

「え、これ拾つてきちゃダメでしたか？」

「違うのつ、すぐ教会行つて説明受けてつ

時間との勝負つーと、泣きながら叫ばれて、私達は慌ててギルドを飛び出した。

神聖石と、祝福。

神父さんは猫だった。

ネコ耳とかではなく、もろに猫人。

イメージでいうと長靴を履いた猫？背丈はリージくらいだけれど、白い顎鬚？を伸ばしていて、虎縞の模様も美しい老猫様でした。友人が「おつもちかえりーっ」と叫んで、小脇に抱えてハイスキップで逃走する姿を幻視した。

「どうしたんだね、リージ」

目を細めた猫神父様は、声も良かつた。

友人がきやーきやー言つてる声優さんに似てる。

本当、友人がここにいなくて良かつた。猫神父様の身の安全的な意味合いで。

「はい、なんだかミアリスさんが」

「これを急いで持つていくようにと」

猫神父様は目を見開いて、息を飲んだ。

「神聖石つ、流れ着いていたのかね？」

私とリージは頷く。

「ちょっと待つていたまえっ」

慌てて祭壇に駆け寄った猫神父様は、祭壇の中から箱を取り出し、そこから布を取り出し祭壇の上に広げた。

「ここへ」

促されて、それを置く。

すると聖石は輝き、光りを振り撒きだした。

「素晴らしい、ほとんど力が失われておらん

「あの…神聖石つて何か聞いてもいいですか？」

「おお、すまぬ。だが先に手続きをすませてしまおう。これを見つけたのはリージと君の二人かね？」

私は頷いて、

「ヒイラギです」

と、自己紹介をした。

「私はこの教会の神父でヨルギル。よろしくのお」

私に名を告げ返して、猫神父様は聖書らしき書物を広げた。

「神の柱の欠片を見つけし幸運よ、彼らの中とどまり形となれ」
ぶわっと、石と私とリージの体が強く発光した。

「え」

「うわっ」

驚く私達に、猫神父様は書物を閉じて満足そうに頷いた。

「これは… いつたい…」

淡い青い、神秘的な輝きはなかなか消えない。

リージが不思議そうに両手を見る動作は分かったが、光で姿はよく見えなかつた。

たぶん私も同じ状態かもしない。

「ギフトスキルが授けられておるのだ、神聖石は長く放置しておる」と人や世界の邪気を吸収し魔を呼び寄せるのだ

「え、でも聖石が生えてたり、薬草が」

リージの疑問に猫神父様は、悲しそうに首を振つた。

「それはまだ邪気を吸収してない期間だけで、神聖石は聖域になければ危険な力ある石なのだ。西の魔都区が出来たのも、神聖石のせいだと言われておる」

「うん、だからニアリスさん慌ててたのか」

魔都区がどうゆう所かは分からぬが、響きからしてヤバイことが分かる。

「ゆえに急いで神聖石から神力を抜く必要があつたのだ。抜いた神力は最初に石を見つけた者に吸収され、ギフトスキルとなる。ただし教会で祝福のスキルを持つ神父のみが実行できるのだ」

「祝福？」

「うむ、神聖石に限らず、神の力を害無く人の身に降ろすスキルだ」

猫神父は微かに笑つた。

「「」のスキルを持つ神父は、必ず聖域近くの教会に派遣されるのだよ。この時のために。まさか生きているうちに使えるとは思わなかつたがね」

リージも知らなかつたくらい、神聖石が聖域から出でてるのは珍しいことなのだろう。

「ちょっと反省しておく。

原因、私だし。うん。

そして、やつと光りが収まつた時、私はともかく…リージの姿は明らかに変化していた。

「うわ、髪が伸びて…なぜ?」

「リージ…耳」

リージの耳が尖つていた。

まるでダークエルフのよう」「……それだけではなく、耳の後ろから黒い羽根のような葉っぱのようなものが、髪飾りのように生えていた。

そしてリージが最初に気づいたように、髪が私と同じくらい伸びていた。

私の指摘にそれらを触つて、リージは声も出せずに「なにこれ?」と、唇を動かしたのだつた。

ギフトスキル、覚醒。

リージは頭に私の持っていたタオルを被つて、ギルドへと戻った。ミアリスさんがなぜか、料理人のおばさんに怒られて小さくなつていた。

「なにがあつたんですか？」

「あつ、ヒイラギさんつ、リージくんつ」

私達の姿にぶわわつと涙を零す。

「じめんなさ」——つ、慌てて、報酬渡すの忘れてましたああつ

「あ」

私とリージは同時に気づいた。うん、私達も忘れてたね。

「うう、減給処分ものですう」

「まったく」

『ごんつとおばさんはミアリスさんを殴り、奥の職場へと戻つていつた。

「もしかして、上司？」

「上司でお母さんなんです」

それから『ごんつとケースを出した。

「こちらの聖石総量、金貨一枚で、薬草の依頼三件で銅貨八枚となります」

「金貨を銀貨で貰えますか」

「はい」

銀貨五枚と銅貨四枚を受け取り、残りをリージに渡した。

そして

「スキル確認と更新をお願いします」

「はい、ギフトスキルですね？」

猫神父様が言うには、ギフトスキルを確認更新する場合は、無料で出来るらしい。

なにせ神の力…場合によつてはとんでもない物もあるらしい。

うん、私の中にあつたレベルのついてないものとかも、そういうのに含まれてるのだろう。

「ヒイラギさん…僕の一緒に確認してもらひますか？」

「ん？出来るの？」

「あ、はい。パーティメンバー同士なら確認可能ですよ」
リージは早く自分の身に起こったことが知りたいのだろう。ギルドカードを出して、水晶に触れた。

私はカードを出さず、同時に同じ水晶に触れた。

会得スキル

- 『薬草知識B』 『剣技・ナイフC』
- 『聖石採取B』 『家事全般D』
- 『覚醒・古代ダークエルフの血族』
- 『覚醒・森の王』
- 『覚醒・精霊の友SS』
- 『運命の導き』
- 『異世界への片道切符』

「……………覚醒？」

リージが呟くと、頭の中に説明が浮かんだ。

- 『覚醒・古代ダークエルフの血脈』（血筋の中で最も力ある種族への覚醒・長寿な戦闘系エルフ。古代種の力は強大）
- 『覚醒・森の王』（血筋の中で最も力ある種族への覚醒・長寿な樹木種の中でも特別な存在。森の支配者）
- 『覚醒・精霊の友SS』（血筋の中で最も相応しい力への覚醒・精霊術師の資質）

「うん、なんか凄いね…」

「他の二つも気になります」

『運命の導き』（詳細不明・発動条件『婚姻』）

『異世界への片道切符』（詳細不明・発動条件『婚姻?』）

「詳細不明…って」

「なんか、この二つは私と関係しているのかもしない。
なにせ、『異世界への片道切符』だ。」

アーサーさんだって、傍観者の立場に立つても普通に好きになつた人とかいただろし、そうゆう人を連れて帰りたいとか思つたりもしただろう……うん、つまりリージは今の所私の婚候補なのかもしない。

「あ、薬草知識のレベルいつのまにか上がつてました」

「へえ、よかつたねリージくん。じゃあスキル更新してもらえるかな？」

私達の眩きに首を傾げながらも、ニアリスさんが促がしてきたので、リージは頷いた。

「スキル、更新」

履歴状態になつたカードには文字が増えていた。

会得スキル

- 『薬草知識B』 『剣技・ナイフC』
- 『聖石採取B』 『家事全般D』 『精霊の友SS』
- 『覚醒・古代ダークエルフの血族』
- 『覚醒・森の王』
- 『運命の導き』
- 『異世界への片道切符』

「あ、力の方は覚醒が取れたね」

「はい…でも、ちょっと安心しました…」

リージはタオルを取る。

「もしかして、僕は両親の子じゃなかつたのかと…」

「うん、なんか凄い先祖がいたみたいだけどね」

「あまり実感わきません…」

ミアリスさんはリージの容姿変化と履歴を見て、目と口をまん丸く開いて硬直してしまった。

「次はヒイラギさんですね、僕も見ていいですか?」

うーん、ちょっと不安だけれど、『スキル偽造』を発現させておく。

「いいよ」

増えたのがどんでもないものでなければいけないけど…

会得スキル

『サムライ進化A』『剣技・刀B』

『一族魔法SS』『細工師AA』『家事全般C』

『ちやぶ戻しSS』

『魂生成』

『スキル継続』

『異世界へのフリー切符』

…うん、突っ込み所は『ちやぶ戻しSS』だね。

スキル更新、完了。

『「ぢやぶ台返しり』（どんな重い物体でも気合いでひっくり返せる能力）

『魂生成』（死んだ人間・または死の床に臥した魂の保存・生成正し、近しい身内、配偶者、恋人の願いが必要）

『スキル継続』（得たスキルを世界を越えても継続できる）

『異世界へのフリー切符』（自由に世界を行き来できる。正し、始点となる世界に碇であり指針となりうる人物の任意が必要）

「うん、何だかよく分からぬ物もあるけど、深く探るとヤバイ気がしたので

「スキル更新」

して、水晶球から手を放した。

「…ヒイラギさんのも、なんだか凄いですね」「なんかぢやぶ台返しは、カッコ悪いけどね」

「え、どんな重い物でもひっくり返せるって、凄そうですが…」

「あ、もしかして、リージはぢやぶ台つて知らない？」

リージは不思議そうに頷いた。

「…つてことは、通常スキルに含まれているだろ？…たぶんどこかの地区に日本っぽいエリアがあるんだろうと思う。

「ぢやぶ台つてね、小さなテーブルのことだよ。うん、伝え聞いたイメージが強くて…頑固で癪持ちな父親が会得しやすいスキルのはずで…私が持っていても、発動出来そうにないスキルだよ」

「そうですか？」

「うん、気合いでひっくり返せるんだよ？…気合いがちょっとね…このスキル名で、気合いを入れられるはずがない。

「…の異世界つてスキルは、僕のものと似てますね…」

「うん、たぶん効果も似てるのかもね。リージの方は結婚しないと、効果は正確に分からぬみたいだけど」

スキル更新を終え、ちょっとお茶にしようか?と、リージを誘った直後、ギルドのドアが勢いよく開いた。

「あ、そういうえばさつき、アイリーフちゃん達がリージくん達を探してたわよ?」

ミアリスさんが、息を切らしたアイリーフを見て、言った。
うん、見れば分かるから。

：本当に残念な天然さんだね、ミアリスさん。

アイリーフはリージに気づいて何か叫ぼうとして……リージの外見の変化に固まつた。

リージは気にする様子もなく、私の手を引いた。

「いきましょう」

「お茶はどうする?」

「家で……僕がいれますよ」

「ちょっと待ちなさいよ!」

アイリーフと下僕はギルドの出入り口を塞いだ状態で、引き攣つた声を上げた。

「り、リージ、リージよねつ、なんでどうしちゃつたのソレ、髪が、耳が」

リージは深々とため息を吐いた。

「なにか、用?」

「何か用つて、そんなの、どうして私の質問に答えないのよつ、さつきも無視するしつ」

「くだらない、どいて、邪魔」

空気の温度が、氣のせいではなく下がつた氣がした。うん……どうやらリージは、完全にアイリーフを見限つたようなのだが、アイリーフは杖を折られるまでされたのに、気づいてないらしい。

それが更に腹立たしいのか、リージの放つ空氣がひんやりしている。ん?これ、もしかして、精霊の力かな?

神しゃま効果が、何となく『力』の動きが分かる。

そういうえば、魔法使いと精霊術師は何が違うんだろうか？

このままにしておくと、精霊の力が勝手に発動しそうな気がしたので、とりあえず落ち着かせようとリージの頭を撫でてみる。うん、集まりつつあつた『力』がふわんと溶けた。

「リージ、落ち着いた？」

「あ、はい」

なぜだかリージは恥ずかしそうに俯く。

そしてなぜだか、アイリーフの視線が私に向いていた。

嫉妬と嫌悪の色が見える表情で。

対戦？と、鍛冶師

さて、唐突だが場所はギルドの裏庭…ちょっとした広場になつていて、訓練場のようになつていた。

初心者が希望すれば、簡単な護身術武器の扱いを教えてもらえるそうだ。

ミアリスさんのお母さんに。

うん、アイリーフとその下僕達で出入口を塞いでいたから、夕飯を食べに来たり依頼を終えて帰ってきた人達の邪魔になつた。それに眉を寄せたミアリスさんのお母さんが、リージを呼んで裏口を指さしたのだ。

揉め事は外でやれというわけだ。

リージを促がしたのは、アイリーフ達がからんでいるのがリージで、彼女達に言つても私達が動かなければ聞く耳ももちそうにないからだろう。

そして

「スライムも倒せない剣士どのに、稽古をつけてやるよ」と、下僕の一人がすらりと剣を抜いて言った。

うん、スルーしたのが腹立たしかつたらしい。

「ちよつ」

アイリーフは目を丸くして、止めかけたが私を見てそれをやめた。リージが私の前に出ようとして、アイリーフは叫んだ。

「リージはどいてなさいよつ！そんなスライムも倒せない奴と、組む価値なんてないって教えてあげるんだからつ！」

「黙れ、お前こそ俺が誰と組もうと関係ないだろ」再び精霊の力が集結しだす。

「リージ」

頭に手を置いて引き寄せる。

「え、あ」

よしよしと頭を撫でてから、一步前に出た。

「いい加減面倒だから、私がやるよ」

リージの冷たい声に顔色を失っていたアイリーフは、私の言葉に笑みを浮かべた。

顔立ちは可愛いのに、あんまり可愛いくない…嗜虐的な微笑みだつた。下僕の方は精霊の集結に気づかなかつたのか、苛ただしげに舌打ちしてリージを睨む。

できるならリージも一緒に打ち負かしたかつたのだろう。実力的に出来るとは思えないが。剣とナイフではリーチ差で剣の方が有利そつだが、リージの素早さと体力からいつても下僕くんに負けるとは思えないし。

「じゃあ剣を抜いてかまえりつ」

私はわざとらしく肩をすくめて、呆れた様子でため息を吐いた。

「聞こえなかつた？ 面倒だつて、いいからおいでの」

それにこれは剣じやない、刀だ。呟いて、素早く柄に手をかけた。

「馬鹿にしやがつてつ」

わーと駆けてくる相手に腰を落とし、刀を振るつた。

ぼとぼとぼとつ…と、剣のなれの果てが地面に落ちた。

下僕くんは自分の手元を見て、完全に固まつて……私はその様子を見て、顔を顰めた。

「…未熟」

「なつ」

下僕くんの顔が、怒りで一気に赤くなる。

しかし別に彼に言つたわけではない。

「剣だけ、切り落とすつもりだつたんだけど…うつかり首まで切り落とす所だつた」

もう一人の下僕くんが気づいて、「ヒイツ」と悲鳴を零した。

うん、首からだらだらと血が零れてるから。

駆け寄ってきてたから、ちょっと間合いの把握が上手く出来なかつ

たようだ。

「うん、でもいいよね？剣を抜いて、向けたんだ…当然殺される覚悟だつしてただろう？」

「にこりと笑い、首を傾げてみせる。

下僕くんは首に手を這わせ、ぬるりとした感触に青ざめて…へなへなと座り込んだ。

おおつーと、ギルドの建物から声が上がる。

建物の裏手にある窓には、それぞれ飲み食いしながらも冒険者達が張り付いていた。

そして、一人が、窓から転がり落ちるかのように飛び出した。

背丈はアイリーフと同じくらいの、けれど『ツイ女性』だった。

「リニアさん？」

リージが首を傾げる間に、固まっていたアイリーフと下僕くんを蹴り飛ばして、へたり込んでいた方の下僕くんの襟首を掴んで放り投げ、一直線に私の前へと進んできた。

正しく、突進としか言いようのない迫力だった。

そして、ズサーンと音を立てて、私の前で正座をして頭を下げた。

「すいません、その剣を見せて下さい」

と。

思わず見とれるほどに見事な、土下座だった。

「…リージ？」

「村の鍛冶師のリニアさんです」

雄ライオンのように広がった金茶の髪に、茶色の瞳をキラキラさせて…ゴツイけれど妙に愛嬌のある可愛い顔立ちの…たぶんドワーフっぽい女性の鍛冶師、うん、予想外だったね。

リージは苦笑を零した。

「いつか、ヒイラギさんの刀を見たら、飛んでくると思つてましたうん。確かに飛んできた。

そして見事なスライディング土下座だった。

もしかして、スキル持つてるんじゃないだろうか？

幻想宝具と、スキル

あまりの迫力、あまりに見事な土下座に、私は苦笑して腰から刀を取り外しスルリと抜いて見せた。

うん、私以外には扱えないって効果もつけてたから、本当に見せるだけだが。

「見るだけで良ければ、どうぞ」

「ありがとう」

目の輝きが三割増しになった…嬉し涙？

しかしランランとしていた瞳が「ん？」と丸くなり、顔色はさあ…と青くなつていった。

あれ？見るだけなら、害はないはずなんだけどな？

首を傾げた私とリージの前で、彼女は正座のまま呼吸を乱した。うん…忘れてたんだ。

この世界には『鑑定スキル』があるつてことを。

「アヴェロン王国の選定剣つ、つづりつ、ジパング帝国の国宝刀つ、神が創りし幻想宝具つ」

叫びは悲鳴だつた。

あー…うん、そういうえばアーサーさんが創つた世界でしたつけ：何だから引っかかる国名とか、単語とかに、少し意識を遠くへとやつた。

「幻想宝具？」

リージが首を傾げるのに、リーナさんは青ざめたままが目を輝かせて言つた。

「アヴェロン王国の選定剣と同じ、世界神が創造した宝のことよつ、これは刀だから、ジパング帝国の国宝刀でしょ？どうして持ち主がこんなところにいるの？基本国から出れないでしょ？つづ！？」

「え？」

リージの目が私を寫す。リニアさんの言葉通りなら、私は島人じゃないことになるからだろ？

私は手のひらをかざした。

「ちょっと待つてください。ジパング帝国ってどこですか？私は島国出身で、そこはジパングという国ではないです」

「ええーーーっ！ジパング帝国以外にも幻想宝具の刀がある土地がつ！？」

叫んでから私を上から下まで見て、リニアさんは言った。

「あ、そういうえば『着物』じゃない、帝国の人じゃないの？本当に？」

「うん、刀に着物ね…サムライ進化のスキルもあつたし、忍者とか芸者とかもありそうだな…と、思う。」

「帝国の者ではありません。ジパングという名前も初めて聞きました。そこにはこれと同じ刀があるんですか？」

「そのはずよ、幻想宝具『ざんてつけん』特性・ある一種の食材以外、切れぬ物は存在しない史上最高刀。扱い手を一流のサムライ（モデル有り）に、する力を持つ刀？つて、見たけど…見せてもらえて私は嬉しいけど、これって普通…見せちゃいけない物じゃない？」あははと乾いた笑いをリニアさんは零した。

「わ、私、今日が命日になるのかしら、ううんでも、持ち主つきの幻想宝具を見られたんだもの、ドワーフ一族として、死んでも悔いはないわ」

目が虚ろだった。

「うん、別に殺しませんから。あんまり見事な土下座だったから、つい見せてしまった私が悪いんですよ」

「土下座？」

「え、さつきの頼み方のことですか？」

「ん？スキルじゃないかと思うくらい凄かつたから」

「私ここ数年スキル更新してなかつたから…あれ？あの頼み方、い

つからしてたつけ？

やつと顔色がまともになつたリニアさんにほつとして、顔を上げると半分忘れていたアイリーフと愉快な下僕達が田を回して倒れているのに気づいた。

「あれ、そういうえばアレ、手当しないと出血多量でヤバイかも」「別にいいんじやないですか？放つておいても」

私の視線を追つて、リージが冷やかに切り捨てるのに…ミアリスさんが駆けてきて「放つておけないからあつ」と、突っ込みを入れ続けて倒れて潰して…彼女達にトドメをさしたのだった。

「ああ、なにやつてんのつ、ミアリスつ」

「リニアちゃんに言われたくないいつ、うわあんつ、ごめんねつ、アイリーフちゃんつ、しつかりしてええええつ」
カオスだと、私は何となく呟いた。

しかし一つ分かつたことがある。

幻想宝具…神しやまの力で創つた物は、鑑定スキルで分かるらしい。そのわりに、私の装備一式を見て騒がなかつたつてことは、持ち主の許可を得て見せてもらうと『見れる』のが鑑定スキルなんだろう。危なかつた…換金所で、下手に私が神しやまの力で創つた物を出してたら…うん、きっとあのアクセサリー出すよりヤバイことになつてただろう。

あー…神しやまの力で細工物の材料創るのもヤバイから、確かにレア物…これ以上は作れない。

うん、でも趣味で創る分には、世に出さなければいいか…と、思いつつフリー・ジを促がしてギルドへと戻つた。

「えつ、ヒイラギさんつ、手当て手伝つてくれないんですかつ」ミアリスさんの叫びに振り返つて、小首を傾げる。

「とりあえず止血しひけば、死にませんよ。それに、先に剣を抜いて向けたのはそっちです…私が手当をする義理も義務もないでしょう？」

「まったくだね、ほらミアリス、血止めの薬塗つたら早くカウンタ

ーに戻りな、私のスキル確認するよ」

うん、リニアさんが心配したのって、実はミアリスさんだけだったらしい。

蹴り飛ばしたり放り投げたの、彼女なんだけどね。

ちなみにリニアさんのスキルには、やっぱりあった。

『土下座SS』（心から真剣な願いを訴えるスキル。その想いの強さによつては、神ですら願いを叶える力を産む。）

うん、履歴見せてもらい、土下座のスキル効果の説明も聞きました。しかしあぶん、SSになつたの、私のせいかもしれない。私が土下座を見事だと感心してたら、神しゃま…めちゃくちゃはしやいでたし。

人神じゃないけど、神を宿した人という意味なら正しく人神だし、スキル効果で願いを叶えると祝福を与えたことになるんだろう気がする。

神しゃま効果…は、私にしか適応されないようだし。

あれ？でも、幻想宝具の持ち主になつた人には…神しゃま効果ありそうな気も…

とにかくリニアさんのスキルを見て、リニアさんはいつの間にと田を白黒させてたしミアリスさんも凄い凄いと叫んで……直前まで心配してたアイリーフ達のことをすっかり忘れ去つてしまつたようだつた。

修行と、お茶会

リーニアは鍛冶師だが、調金細工師でもあると知つて、私は次の日から彼女に弟子入りすることになった。

リージも精霊術師になるかどうかは分からぬが、力の制御を覚えるため教会の猫神父様の師事を受けることになり、出会つてから初めての別行動だ。

まあ、慌てて稼がなくともいいくらい資金はあるのでいいだろう。うん、この世界に来てから…妙に金運には恵まれてるので、材料費は山ほどある。

アクセサリー製作は私の趣味だ。

留め金や細かな鎖を作るのは大変だったが、リーニアさんのアドバイスも受けて何とか製作出来た。

「器用ねえ…こんな細かい鎖、初めて」

「そうですか？」

「そうよ、首飾りなんかは大抵、革ひもに羽根とか石とか飾るタイプくらいよ。庶民のアクセサリーね」

「ああ、そういうのも好きです」

指輪にネックレス、イヤーカフを同時進行で製作して…合間に休憩中のリーニアとお茶をする。

そんな生活が暫く続いた。

リージの力の制御はなかなか難しいようで、帰つてご飯を食べてお風呂に入つて寝るという作業を、作業としか言いようのない様子でこなすので、どんな修行をしているのか詳しくは知らない。でも、私が家事全般を引き受けても、お礼は言つても恐縮はしなくなつた所はいいことだろう。

ちなみにリージの長く伸びた髪は元の髪形へと整えられた。うん、ベッドから起き上がる時、腕の下にあつて…ちょっと首を痛めかけたらしい。

それにあの長さだと、完璧に神秘的な美少女にしか見えない自分が嫌だったようだ。

アイリーフ達が、またリージに絡んだかどうかは聞いてないが…リニアさんから何かあつたらしいことは聞いた。

なんか下僕の方一人は、怯えて使い物にならなくなってるらしい。

「あの子達、私が苦手だから。レリーフに引っ張られてこなければ、ここには近づかないわよ。以前あの子達が冒険者になるための装備を揃えようと来た時、追い返したからねえ…」

「どうしてですか？」

「私は『子供』に持たせるような刃物は作ってないからね」

リニアさんは何か思い出すかのような表情で、ため息をついて言った。

「勇者ヒーローするような子供に真剣持たせないでしょ？昔は…リージのお母さんの師事を受けてた頃のアイリーフなら、分かつてみたいだつたけど…今はダメね。レリーフもビシッと叱ればいいのに、あの子には甘いというか、弱いんだから」

怒るリニアさんに、ついくすぐすと笑ってしまった。

「仲いいんですね」

「そりや、」

リニアさんとレリーフとミアリスさんは、なんと同い年で幼馴染の仲という話だった。

噂をすれば影…と、言つか

次の日、リニアさんの家には、休日のミアリスさんとレリーフが遊びに来て、私と遭遇することとなつた。

「まさかっ、本当に噂どおりにリニアちゃんに彼氏が出来てたなんてつ」

手が離せないリニアさんの代わりに、戸を開けて顔を合わせたとたんのミアリスさんのセリフがコレだった。

大げさに驚いて、よろじとよろけてさえ見せる芸の細かさを、当然

私とレリーフはスルーした。

「久しぶり、ヒイラギ」

「うん、久しぶり」

まだリージとの会話を引きずつて居るのが、少々~~おもしろ~~ない笑みを浮かべる彼女に笑みを返した。

「この間は『めん』

「それはリージに言つてあげなよ」

俯く彼女の肩をそつと叩いて、家の中に入るよう促す。

「あれ？ なに？」の空氣…まさか？、レリーフまでヒイラギさんと

？

私は『アリスさん』、生ぬるい視線を向け、そつと彼女の前でドアを開めよつとした。

「うわああんつ、待つてえつ、『冗談だからああつ』

お茶の支度が終わる頃、丁度リニアさんは一段落つけて作業場からやってきた。

レリーフを見て、ふんつと鼻を鳴らす。

「まだ落ち込んでるんかい、レリーフ」

「リニア…」

「まつたく、敵に対してはビームでも不敵になれるのに、相変わらず身内には弱々しいねえ」

「だつて、アイリーフがあつ」

耳をへによりと伏せさせで、レリーフはしきしき泣き出した。

うん、初めて会つた頃の姉御っぽい風格は、微塵も残つていない。

「いい加減、甘やかすのはやめて、叱り飛ばすことも必要だよ」

「そんなことしたら、ただでさえ嫌われてるのに、もっと嫌われちゃううううつ」

「そんなことないよ、レリーフちゃんつ、アイリーフちゃんはちゃんとお姉ちゃんのこと大好きだよ」

あわあわと焦つて『アリスさんが声をかけるが、レリーフは顔を手

で覆つたままふるふると頭を振つた。

「だつて、お姉ちゃんは余計なことしないでつて、リージくんに嫌われたの私のせいだつてつ

「あん？ そんなのハツ当たりの言いがかりじゃないか、

それぞれの前にお茶を置いて、私は首を傾げた。

「席、外しましょうか？」

「いいよ、この際ヒイラギさんも聞いといておくれよ」

サンドイッチと、ケーキ。

「あ、そうだこれ」
レリーフがふと、暗さを少し消して持っていた手提げ袋から布包み
を一つ取り出した。
すると、リーナさんとミアリスさんの顔が輝いた。
「差し入れのサンドイッチとケーキよ」
「レリーフちゃん大好きっ」
「嬉しいわあ、レリーフの手作り久しぶり」
私も椅子に腰を下ろして、彼女の手元を見た。
布包みを広げれば、薄いセロファン紙のようなものに包まれたサン
ドwichと、パウンドケーキが出てきた。
「うわ、美味しいぞ」
「なんといつてもレリーフちゃんの家事レベルは△△だもんつ、実
際すっごく美味しいのよ」
ミアリスさんがはしゃいで喜び、「リーナさんが顔をしかめて」「
こらっ」と叱つた。
「あんた、ギルド職員が個人のスキルを勝手にばらしていいの?」
「あ」
ミアリスさんの顔色があつと青くなる。
「うわああんつ、「じめんなれこつ、レリーフちゃん、お母さんには
言わないでええつ」
「別にいいよ、隠すもんでもないし」
「レリーフ、「じめんりつことは反省を促すためにも、きちんとしない
と。いつか困るのはミアリスだよ」
「まあ、それより食べよ、いつも通りなひ、リーナもヒヤヒヤもこ
飯まだでしょ?」
確かにお皿は回ってしまつていて、一時になるかどつかといつ時間

帯だが、作業に熱中していくご飯はまだだつた。

リニアさんと私の家事レベルは一緒だったので、大抵お皿は休憩の
お茶の後、のんびり食べに出ている。

小さな村だからか、生活習慣は知れ渡つてているようだ。

リニアさんは仕方ないなあという顔をしながら、サンドイッチを手
に取り私にも取るよう促がした。

うん、サンドイッチ久しぶりである。

「いただきます」

一口含んだだけで、その美味しさが分かつた。

パンはふかふかしつとりで中の野菜はシャキシャキ、ペースト状の
ディップは垂れることのない状態で野菜とパンの美味しさを引き立
てる。

メインらしい鳥肉（？）には香ばしい焼き目と仄かに柑橘系の香り
がして、噛み切りやすいほどよい食感が堪らなかつた。

「うわっ、弟くん並」

「弟くん？」

つい零した感想に、問い合わせられる。

「うん、友人の弟くんで、友人に料理を仕込まれてる子」

まだ小学生なのに、彼の作るご飯やデザートは絶品である。

「友人が言つには、男心を掴むにはやっぱり胃袋を掴まなければ…
らしい」

「ふーん……ん？弟なんだよね？」

「うん」

首を傾げるリニアさんを置いて、ミアリスさんはケーキを切り分け
て食べ始める。

やはりパウンドケーキのようで、中にはドライフルーツと胡桃が入
つてゐるようだつた。

「くううう、生きててよかつたあつ」

「大げさな」

「レリーちゃんは、自分の料理の腕を分かつてないつ！私が男だ

つたら、すぐさまプロポーズするのに」

「ごめん、ミアリス。あんたが男だったら、即答で断つてるから」「ええっ、なんでえっ」

「だつてあんたが男だつたら…軟弱そつレリーフは腕をさすつた。想像して鳥肌が立つたようだ。

確かに、ミアリスさんの残念な性格は、女性だから許されているとこがあると思う。

「レリーフは甘つたれた男と、なよなよした男が生理的にダメだからねえ」

「えー、じゃあヒイラギさんは何で平氣なの？ヒイラギさんも外見上は細いし、物腰は柔らかいし、顔立ちも綺麗だけど」

「ヒイラギは性格がしつかりしてそうだし、心意気つていうか、敵に対する心構えとか対応が氣に入つたから平氣。それに立ち振る舞い、凛々しいじやない？」

「確かにねえ」

ミアリスさんは呻いた。

「そ、そんな、彼氏なんて興味ないつて一人がつ、ヒイラギさんつ、リージくんはともかく、レリーフちゃんとコニアちゃんまで落とすなんてつ、なんて手が早いの…」

がしりと手を握られ、ミアリスさんは潤んだ眼差しで私を見た。

「私も恋人の一人にして下さいつ

するりとレリーフとリニアさんは、椅子から滑り落ちかけた。

「あんたこそが、目えつけてたんかつ」

「ミアリス…あんたねえ…」

「いや、ごめんなさい」

そつと手を外して、提案を断ると…「回答つ」と呻いてミアリスさんはテーブルに突つ伏した。

私はケーキにも手を伸ばす。

ドライフルーツのレーズンっぽいものは、実はレーズンじやなくてダークチエリーっぽい味がした。

食感はしゃりしゃりしていい美味しい。

お菓子は久々だったので、凄く嬉しかった。

そろそろチョコとかも食べたいなと思う。アーサーさんの創造した世界だし、彼が嫌いでなければ存在していると思うんだが…

「まあ、ヒイラギはモテそうだし、故郷に恋人とかいるんじゃない？」

レリーフがくすくす笑いながら言つ。

すっかり顔色もよくなり、普段の調子が戻ってきたようだ。

「そうだねえ、許嫁とかいそう」

リニアさんまで頷きながら言うのに、苦笑した。

「そうですね、故郷でもよく告白されましたよ女性に」

筆頭は友人だが、後輩とかによくラブレターを貰つてた。

……共学だったし、特に勉強・運動が出来るつてわけでもなかつたんだけど…不思議だ。

「でも同性と付き合つ氣はなかつたですし、恋人はいませんよ」

「許嫁なんても、勿論いませんでした」

「そつか……」

ふと沈黙がテーブルに落ちた。

三人の動きが止まつていて。

私は首を傾げた。

「「「「ど、どうせ」「?」「」」

妙に強張つた声が、小さく響いた。

本当に小さな咳きだつたけれど、三人の声がぴつたりハモつたのでちゃんと聞きたれたのだ。

「ちょっと、ヒイラギあんた女なの？！」

「うつそ、ちょっと待つて」

「ヒイラギさんっ、本当ですか？」「

三人の慌てふためいた様子に、傾げていた首を反対方向に倒した。

「別に、性別を言った覚えはありませんが」

男性扱いに、否定も肯定もしてませんでしたけどね。

「ただけどねえ」

「慌てることですか？」

「いやその…」

「あはは…女人人に告白しちゃった……」

私はミアリスさんの肩に、ぽんと手を置いた。

「気にすることありませんよ、友人は女性で、男性の恋人なら四人ほどいますが、女性の恋人も十二人います」

「セウジウう問題じゃないですしつ、っていうか、その友人す」「」

なにやらぐだぐだになつたまま、休憩時間を終え…私は調金作業に戻つた。

見学にレリーフとミアリスさん、リニアさんもいる。

「うわー、綺麗っ」

「どうりで…男にしちゃ あ纖細な細工をするとは思つてたんだよ…」

「これはもうすぐ完成ですよ、よかつたらあげましょーか?」

銀細工の髪留めは、花に鳥、猫と少し似通つたデザインにしてみた。ちょうど三つだしいいだろうと思つて言つと、ミアリスさんの目が輝き、レリーフも嬉しそうに微笑んだ。

「いいのかい?これはいい出来だよ?」

「初めて作った物ですし、リニアさんには場所も道具も借りてますしね」

「あ、私この鳥さんがいいですっ」

「ん、ミアリスが鳥なら」

「私は猫ね」

くすっと笑つてレリーフは自分の耳を撫でた。

「私が花か…似合うかね?」

「大丈夫ですよ」

私はリニアさんのライオンの鬚のような髪を梳いてみた、つけるとしたらこの辺だろ？

「きっと似合います」

ん？なんで三人とも黙っちゃうかな？

それになんか顔赤い？

「…天然タラシ？」

「リージくんもやられてましたよ」

「まじったね…」

こそこそと囁き合う彼女達は放つておいて、どうせあとかよつとだから今日中に渡した方がいいだろうと作業の手を進める。しかし仕上げの作業を進めながら…変なことに気付く。なんか、この髪留めたちに『力』が集まっているのだ。

うん、別に神じゃまが何かしているわけ…じゃ、ないな…なんだろ？

ともかく仕上げて、三つ田を完成させた時…『力』がそれらに定着するのを感じた。

「ん？」

ぴくんと震えて振り返ったのはリニアさんだった。

「今、何か…」

「あー…、一応完成しました、けど…」

「えつ、ちょうどいいちょうどいい」

それぞれを三人に渡して、額に浮いていた汗をタオルで拭った。

「どうですか？」

「すゞく可愛いつ」

「そうだね、ありがとヒイラギ」

わつそく前髪を留めるリニアさんは少し猫の表面を撫でるレフ

ーフ…そして

「どうですか？リニアさん、何か分かりますか？」

私の問いかけに、たぶん『鑑定』していたリニアさんは深くため息

をついた。

「本当に貰つていいのかい？」

「一度あげると言つたことを、ひるがえしたりしませんよ」「ん？高価な価格鑑定しちやつたの？」リニア

「確かに、初めて作つたとは思えないほど綺麗ですもんね」「リニアさんは…もう一度ため息をついて、顔を上げた。

「一個、銀貨一枚」

「ええつ、か、髪留めなのに？銀細工でも聖製加工されてる物じやないでしょっ！？」

「そうだね、普通高くても銅貨五枚くらいだろ？」「

確かに元の材料費である銀の値段は、三三つ分で銅貨一枚と硬貨一十五枚だった。

魔除けの加工を施されている銀は高いらしいが、この世界では金も銀もそれほど高い物ではないらしい。

ちなみに金貨類などの硬貨は少量の金や銀などは混ざっているが、少し混ぜるだけでその色に染まる特殊な液体鉱物を加工して作られているらしい。

国の製貨スキルの持ち主達（そうゆう仕事をついた人達）だけが、加工出来るもので元の液体鉱物も一応見せてもらつた…と、いうか飲んだ。ちょっと白濁としていて、スポーツドリンクの味がした…一応鉱物の一種らしいが、人体に害はないらしい。

場所によっては飲み水代わりにもしているらしいくらい、珍しい物ではないのだ。

ただ賃金は作れない。鑑定スキル持ちじゃなくとも、ちゃんと製貨スキルで作られた硬貨じゃないと、見ただけで違うと分かるらしい。ちなみにスキルを持つてる人でも、ちゃんと国の行政の仕事としてではないと作れないし、場合によつてはスキルを失うという。うん、アーサーさんきっと賃金問題とか面倒だったんだろうなーと思つ。

「他の一つの持ち主へ、声を届ける効果」

暫し躊躇つた後、リニアさんは呟いた。

「魔法効果が、付与されてるんだよ… 魔法具は効果の小さい物でも銀貨価格よね」

魔道具作成と、アイリーフ

「魔道具を作りだすには、一種類の方法がある。魔術師が理論と法則、付与する魔力を生成して道具に付与して作り出す物。それから職人が、世界から付与される物とね」

「世界から付与?」

「滅多にないことだけどね、有名所では教会本部の女神像かね」

私は苦笑して手を上げた。

「すいません、この大陸に来て間ないので、有名所と言われても…」

「ああ、まあ、機会があつたら見にお行き。祈るとランダムにだが怪我が癒える女神像があるのさ」

病は無理だけどねと、少し悲しそうにリニアさんは微笑んだ。そして気を取り直したかのような笑顔に変わる。

「世界からの付与は魔道具と表現するより祝福物と呼ばれることが多いね。魔術師の作り出した物は、効果の方向性が決められる代わりに、付与した魔力が切れると効果も切れるけど、世界が付与した祝福物は効果の方向性はバラバラだし、いつでも作り出せる物じやないけど、効果はほぼ永久だね。物が壊れでもしないかぎり」

「へえ」

リニアの説明を受けた後日、いくつか細工を作りあげ…なんとなく仕組みは分かつた。

アーサーさんが残した仕組みなのだろう。

細工の材料がこの世界の物であること、細工の出来、細工に込めた思い、それらに世界が反応するらしい。勿論ランダムなんだろうけど。

うん。作りあげた腕輪を見ながら思つ。

緑の石を葉のような形に見えるよう組み込んだ銀の腕輪・リージにあげようと思っていたソレにも世界の力が宿つた。

「あんた、銀細工とよっぽど相性がいいんだね」

「んー、でもその髪飾りは三つでワンセット扱いでしたから、実質一つ田ですよ？」

「生涯かけても作り出せない奴の方が多いんだよ」

腕輪をじっと見ていると、何となく効果が分かつた。

「…沈静効果？」

「ん? 分かるのかい」

「なんとなく…あれ? これってスキルですか?」

リニアさんは腕輪を受け取つて見て、頷いた。

どうやらいつの間にか鑑定スキルらしきものを、得られたらしい。レベルは低そうだけど。

うん、価値は分からないし、効果だつて何となくという感じだし。更新するほどのものではなさそうだ。

「確かに沈静効果だね。恐慌状態に陥らない力だよ。精霊術師には丁度いいね、精霊術師は感情の暴走に力もつられちまつから」

返された腕輪をしまつて、道具を片付ける。

「なら、今日はここまでにして、教会を覗いてリージに早速これあげに行きます」

「ああ、そうしてあげな」

教会に向かうと、その入り口の横で膝を抱えているアイリーフの姿があつた。

「うん、面倒だから無視するけどね。

目はあつたけど、何も言わずに扉に手をかけた私に、アイリーフは飛び上がるよに立ちあがつた。

「ちょっと、普通落ち込んでいる女の子がいたら、声をかけるもんでしょう」

怒鳴りはするが、本当に落ち込んでいるのか猫耳はねてしまつているし…眼差しにも私を嫌悪する色は薄かつた。

「どうしてリージは、あんたみたいな他所者を信頼するのよ……」

俯いて声を震わせるアイリーフに、私は首を傾げた。

「さあ？」

「さあってなによそれーっ！」

「だつてそれはリージにしか、分からぬことだし?..」

首を傾げてみせた私に、アイリーフは体も震わせて涙を浮かべた。
「なんで、リージは冒険者なんかになるのよ…っ、薬草採取なんて
しても、もうお師匠様達は生き返りなんかしないのに…っ」

俯いて、ぽろぽろ涙を零す彼女に、私は首を傾げた。

「事情はよく分からぬけど、リージが真剣に冒険者や薬草採取を
やつてるならやつてるだけ、それらを軽視している君とは、絶対に
組まないだろ?うね」

「なつ」

涙を零しながらも睨んでくる彼女の頭に、ぽんと手を置いて退かす。

「よく考えてみるんだね」

そうして私は教会へと足を進めた。

何か怒鳴つてくるかと思ったアイリーフからは、何もなく…それな
らそれでと振り返ることなく。

薬草と、死。

「ヒイラギさんっ」

訓練室にノックして入ると、丁度一段落ついた所だったのか猫神父様はお茶を入れ、リージはテーブルの上を片付けていた。

「こんにちは、」

「おお、これはお久しぶりですなヒイラギ殿」

「お久しぶりです。神父様」

ほんわりと笑い合っている間に、リージはどうにからかもう一脚椅子を持つてきてくれた。

「ヒイラギさん、今日はどうしたんですか？」

「うん、ちょっと面白いのが出来てね。リージにプレゼント」

ハンカチに包んでズボンのポケットに突っ込んでいただけの腕輪を取り出して差し出した。

「えっ、そんな貰えませんよっ」

「貰つて。リージを思つて作った物だから」

「おや、魔道具かね？」

猫神父様の言葉に、リージはぎょっとしたようだった。

「ええ、分かりますか？」

「見せてもらつても？」

まあ、この効果を見てもらえば神父様もリージに進めてくれるだろうと、私は頷いて渡した。

「ほつ…素晴らしい」

そして私の予想通り、猫神父様は腕輪をリージに差し出してくれた。「リージ、天然魔道具の法則は知つておるう？これはお主のために作られた物だ。受け取りなさい」

「で、でも…」

「沈静効果があるらしいんだ。ね、リージ受け取つて？」

私がリージの顔を覗き込んで言つと、リージは凄く恥ずかしそうな

顔になつて…でも猫神父様から腕輪を受け取ってくれた。

うん、もしかしたら男の子だもんね。装飾品恥ずかしかつたか…まあ、リージの役に立つアイテムだし我慢してほしい。

「ヒイラギさん…ありがとうございます」

顔を赤くしながらも腕輪を装着してくれたリージに、私はうんやつぱり似合ひと満足して微笑んだ。

さて、今日は終わりとリージと一緒に帰ることになり、教会を出る時にはすでにアイリーフの姿はなかつた。

リージは周囲を見回して、不思議そうな顔になり…それから、はつと私を見上げた。

「…あの、アイリーフに何か言われましたか？」

「うん。でも私も言つたからね」

「え」

「リージは冒険者として薬草採取、何か拘りをもつて真剣にやつてるでしょ？」

出会つて間もない私でも分かることだ。

「それを軽視しているような子と、組む口なんて訪れないよつてね」
リージは私の言葉に、何だか泣きそうな顔になつた。

悲しそうで、どこか嬉しそうな。

「父さんと母さん、病氣で死んだんです。聖域近くの村なら、簡単に手に入るはずの薬草で治る病氣でした」

教会の出入り口の階段に腰掛け、リージは力なく笑つた。

「でも、あの時期…一つの聖域が、魔に浸食されたんです」

私は猫神父様の話を思い出していた。そう…神聖石と

「西の魔都区？」

「はい…とは言つても、神聖石のことは知りませんでしたけど、當時もどうしてこんな事態になつたのか原因は分かりませんでした。西の聖域の一つが魔に浸食されたせいだと知ったのは…両親が死ん

だ後でした

あつという間でしたと、どこか遠い目をしてリージは当時の様子を語った。

草木は枯れ、水は濁り、病が流行り…魔物は増え力を増しました…

…と。

「この村にも沢山の冒険者が押しかけました。聖域近くの村でも、大変な状態だつたんです。他の所なんか、余計に悲惨だつたらしいです。食べ物や薬草の値段は高騰しました」

「なるほど、買い占めとかが起こつた?」

それならば、アイリーフが根底で冒険者を憎んでいるらしい」とも、分かるかもしない。

リージは頷いて、更に話を続けた。

「それどころか、村人から脅して取り上げたり、盗んだりするような輩もいました。殺されかけた人もいて、母さんが怒つて犯人を突き止めて、火柱を上げたこともあります」

懐かしそうにリージは上空を仰ぎ見た。うん、それって火柱の高さへの目線だよね?

「病人だつたのに、変な話ですが…死ぬ直前まで元気でした。僕に心配かけないように振る舞つてもいたのでしょうか?」

「リージ

私はリージの家で暮らしている。両親の部屋も、魔法使いの研究室も見せてもらつている。

そして、前々からあつたはずの庭の薬草園も。

「リージの家に薬草はあつたね?」

「…はい。でも以前の村では…薬草は簡単に手に入る物…ほどんどの家庭には…無かつたんです。そして変化はあまりにも急激でした。両親は薬草を村に配りました。当初はまだ家にも余裕があつて…でも、両親が発病した時には…手元にも勿論村にも薬草はありませんでした」

リージは苦笑した。

「今、薬草採取の依頼を出している人達は、その頃のことが焼きついてしまっている人や、乾燥させただけじゃなくて…それ以上の長期間の保存法を研究している人や、少量でも効力を高める研究をしている人達なんです」

「なるほど…」

アイリーフには薬草採取が…両親を失った過去に囚われ、すでに意味がないようなことをしているように思えたんだろう。リージは両親の死を無駄にしないため、前を向いて進んでいるのに…たぶん彼女こそが、過去と憎しみに囚われているのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5477p/>

かみしゃまと、いっしょ。

2011年6月12日00時40分発行